

## 強制抑留回顧記

鳥取県 松下盛一

はじめに

入営して六十一年、復員して五十七年余り。お国の為、天皇陛下の御為と一途に滅死奉公、その果てが天皇の命による自らの武装解除も。そして拉致、強制抑留三年半有余の星霜光陰矢のごとし。月日の過ぎる速さただただ夢のごとし。戦友の名も顔も忘れ、過ぎ去り、薄れ行く思い出を掘り起こし思い出しながら、強制抑留体験の真実を回顧し記したるものです。

終戦

通称関東軍第五四九部隊、奉天第一三九八八部隊大矢木中隊（第二中隊通信師団）第三班（無線通信）で、昭和二十（一九四五）年六月第一期の検閲が済み、七月二十日ごろ、突然転属命令が出て、送別会もそこそこに三八騎兵銃を白包帯です

べて巻き、別れを惜しみ七月二十七日早朝靄の中、原隊を後に行軍で、明治三十八（一九〇五）年大山巖元帥が入城した奉天（瀋陽）入城記念碑を横目で眺めながら城内に集合。隊長は桑原少佐、電信第五四連隊と称し、秘密通信連隊で、本土防衛隊として内地篠山に帰るもので、点呼で有線中隊と無線中隊に分けられ、更に中隊で点呼、班別に所属が決められ、数日は内務班の整理など比較的確のんびりと過ごしていると、現地入隊で一般民間人の日本人が初年兵として入って来た。臨戦徴兵である。時には一個分隊八人で、無線訓練の名目で営兵舎外に出て営内と送受信をする無線の開設。しかし分隊長の班長は原隊で有線の班長で無線の事は無知で、開設、撤収も私一人で行わざるを得なかった。隣に満人の西瓜畑が有り、公然と無断で全員が食したりしたが八月に一等兵に昇進。そして対ソ連の対戦車壕掘りの使役命令が出されたが、私は電々公社のケーブル運搬でその倉庫に派遣されていたが、その時点ではソ連に対する恐

怖は微塵もなかった。三日目に腹がシクシクするので便所に入った時、大便が下痢で赤くなっているが当初は何の事か分らなかった。

内務班で古参兵のひと四人で、それまでアメリカ軍の宣伝放送で懐かしい日本の流行歌などを内緒で無線機で聴いていると、突然日本は無条件降伏した様子。初めはデマ宣伝かと思っていたが本当らしい。内密で聴いていたのでこの事は四人全員、秘密にしようとした。そして十七日、米軍機が飛来して赤いパラシュートが二つ降りて来たので、敵来襲、散開せよの命令で武器を持って各個に散開して落下地点へ行こうにも内務班には三八騎兵銃四丁しか無く、古参の順で取り、銃の無い者は帯剣や棒切れを持って散開した。この時点で私は腹が痛いので班長室に行くと、良く知った軍曹の班長がおられたので理由を話すと、「今は緊急時だ、一人で医務室に行ってくれ」との事でようやく医務室に着く。すると軍医中尉は医薬品をほとんど持って逃亡している。主計中尉は連隊

の現金を持って逃亡している状況で、医務室には衛生伍長と上等兵しかいない。仕方なく事の次第を話すと、多分それは赤痢であろうとの事で直ちに隔離された。病室から約五十メートルもある急設の屋外便所に行ったかと思えばまた便所へと一日に数十回も通う事になり、薬も無く絶食で病室で寝ていると戦友の吉田君が、十七日降下した畑で西瓜を二人で食している米兵を連隊本部に連行し、英語会話の出来る長谷川中尉連隊副官の話では「日本が十五日無条件降伏した事を知らないのか」と話した事を知らせに来て看病してくれた。その後私が人事不省になり、二日間生死の境をさま迷うて自意識が出てきた時、薄暗い四角錐の底で両脚を抱えて小さくなっている自分を眺めていて、意識を失った私を戦友の吉田君が泣きながら衛生伍長に何とか助けてくれと頼みに行ったら、カンフルしか無いがそれでも気休めに打つかと言って注射して行ってしまった様子。戦友は私の名前を呼び続けて、その誰か分らない声が段々と上の方

から大きくなって大声の「松下」と言う声でパツと目が覚めたら、両の目に涙をいっぱい溜め一生懸命に呼んでいる吉田君の顔が目映った、そして現世に生還した。その後、奇跡的に便所へ行く回数も減り便も止まったころ、同室の者が皆荷造りをしているので聞くと、この兵舎を毎晩ソ連軍のジープが五色蛍光弾を撃ちながら回るので、危機感から本隊は文官屯の山奥に移動するので合流するのだという事だが、やつとのこと元気が出て歩けるようになったばかりで何里もの行軍は無理で、病弱者は後続発とする事になった。

その夜、無線中隊は中隊長命令で全員、中隊本部前の中庭に集合とのことで中庭に行くと、中隊長は日本刀を抜いて「日本は降伏しても関東軍は健在なり、降伏は有り得ない」と大声で怒鳴っていた。私は白け、自分の体が思う様にならない、どうでもよいと無関心でいた。解散後病室に帰っていると吉田君が別れの挨拶に来て、「必ず本隊と合流して下さい」と手を強く握って泣いてくれ

た。それ以後吉田君とは会っていない。生存しているのか、なにとぞ元気でいて欲しい恩人の一人である。

吉田君と別れ、独り病室で寝ていると色々な事が思い出される。昭和二十年三月十日の陸軍記念日に、満州奉天第五四九部隊通信教育隊へ入隊するため三月五日に広島集合の赤紙により、三月三日、故郷の家で茶碗酒して茶碗を発止と割り、祖母が無事帰還を願う二股茄子の片方を噛み食し、直立不動で家族全員（父は既に応召で出征していたので不在）に挙手敬礼で、本日まで育てて頂いたお礼と日本男子の心意気、覚悟を述べ、村境で村長はじめ多くの見送りに「本土決戦の叫ばれる重大な時、天皇陛下の命を受け満蒙の守護に当るは日本男子の本懐、これに過ぎたるものはありません。本日まで私はじめ家族に賜りたるご厚誼とご援助の御恩は誠に有り難く、終生忘れません。滅死奉公、勇躍出発いたします。ありがとうございました」と挨拶した。徒歩で四キロの米子駅ま

でにぎやかな見送りや駅のホームの黒山の見送りに、母がホームの柱の陰から涙を堪え、二度と面会出来ない満州に出征する愛し子を見つめる姿に、酔いも一度に覚め、母を見る事が出来なかつた。

最終折り返しの生山駅まで同列車で送ってくれた班員の人達の中でも一人の若い娘子は、班長についてどこまでも送って行きたいと泣き騒ぎ、なだめるのに一苦勞したこと等々が思い出され、二十一年、何のために生きてきたのか、こんな異境の地で祖父母や親兄弟に会えずに死んでしまうかと思ふと情けなくて、次から次へと涙があふれ出て止める事が出来なかつた。

本隊が移動した後、毎晩の様に満人が三十人ぐらい、兵舎に助けを求め逃げ込んでくる。私も少し元氣が出てかなり歩ける様になつたので連隊本部室に行つて見ると、尉官の軍服の古いのが散らかして有り、それを悪さに着て週番士官章を掛け、軍刀を腰に下げ歩いていたら、出会つた兵士が敬礼するので面食らつたが、互いに隊や班が違つて

いるので露見せず、可笑しさを堪えて答礼してゐた。そこで逃げ込んだ満人に、有り余る米や他の食料品を適当に一人ずつ持たして帰す事にしたなら、翌晩も次の晩も話を聞いて続々と来たのには閉口した。後は勝手に持つて行けと関知せず、十日ぐらいついてから全員集合して本隊へ合流する事を決めた。私の組は民家から満人の荷台車(ターチョ)を一台もらい受け、それに荷物や食料、飲料品を積んで早朝、城内兵舎を後にした。途中休憩の時、余りにも喉が渇くので死んでも良いと持参の瓶ビールを一本、この世の納めにと飲んだら下痢も腹具合も良くなり、本隊に合流したころは以前の元氣な姿になつてゐた。この時に天佑神助か、自分には赤子から手塩にかけ育てて下さつた曾祖母の守護靈が守つていてくれるのだと独り納得してゐた。

### 逃避行

丘の幕舎生活は比較的のん気で、夜間時々三百メートルくらいの高梁畑から射撃して来るので発

砲付近へ応戦射撃するくらいで、氣付け薬と思つて昼間その場所に行つてみると日本の三八の薬莖<sup>やぶきょう</sup>が散乱している。多分満軍崩れであろう。

丘の所有地はこの地方の屯長が親日家で、長男は日大卒のインテリで日本語ペラペラで、なぜか私といち早く親密になつた。

二キロぐらい離れた幹道の向こうの山に行つてはならないと通達されていたが、内緒で悪友五人を誘い山に行つてみると、山全体が被服庫になつていて、麓の番舎は荒らされ無人で、室内を探すと男女の日本の着物、帯、足袋等が有り、飛行服の夏服が有つたので着服し、飛行機まで頂いてしまつた。かつては日本人が番守していて、終戦時に何者かに襲われたものだと思つた。置いてあつた行李に詰め、何かの役に立つだろうと二人で担ぎ、他の物も持ち帰り幕舎に居ると、誰に聞いたのか他班の者が訪ねて来て、今度行く時は必ず声を掛けて連れて行つて下さいと頼むので後日を期していた。炊事場に薪が必要だが不足であると仲

良しの屯長の息子が言うので、任せておけ、薪を取りに行くという名目で悪友メンバーに加えて十人ぐらいで例の山に行つて驚いた。山、向こうの山にも置く所狭しと軍靴、冬季飛行服、その他近くにある正規被服庫に収納できないので板の梱包のままに山と積まれているではないか。行つた者全員、梱包を幾つも壊し、好きな新品の靴に替え、帰りは十二センチ角一・八メートルの長さの角材を一人が一本ずつ担い、その端に己の欲しい物を吊り下げて帰つて来た。それを見習士官が見つけて文句を言ってきたので「これは隊のために炊事場に運搬しているのに何で文句があるのか」と言う。「そうでしたか、ご苦労さんでした、すみません。しかし今後は隊長の許可を得てから行つて下さい。薪が必要な点、隊長に報告しときます」という事で、その後は全隊で二日間、角材を運搬した。

幕舎のある丘付近に大きな豚が遊びに来るので「豚肉は必要な量だけ提供するので、遊んでい

豚は勝手に撃ち殺さないで下さい」という屯長の申し出を全員に徹底してあったが、ある日、九九式銃があるので見に来ないかと旧知の木下兵長から連絡が有り行くと、裸銃弾を込めて適当に撃っていた。そこへ九十キロ以上もあるかと思われる豚が植えてある大豆を食しに来たのを「松下、撃つてみないか」と言つて銃を渡してくれたので狙いもせず引金を引いたら一発で命中、即死。まあ吃驚したなア、当ると思つてなかつたし豚の処置に慌てた。急遽知人の一等兵と三人で丘の端に担いで行き、埋め終わっていると隊長の巡視に出会い「お前達は何をしているのか」、また私を指して「お前は階級章も無く飛行服を着て、何者だ」と居丈高に人を馬鹿にする声に他の二人はそわそわしていたが、私が「別に何もしてない」と遮二無二弁護すると「貴様、隊長の私に向つて文句を言うのか、官等、姓名を名乗れ」と威張るので向かつ腹が立ち「何を言うか、終戦になつてからまで位官で威張るな」と言うと言つて凄く怒り、腰のピスト

ルのケースに手をかけたので、私は服の物入れから手榴弾を出し、引き金に手を掛け「ピストルが早いか手榴弾が早いか、やつてみるか」と言うとき青くなつて将校幕舎の方に逃げ帰つたので三人が大笑いした。今でも思い出すと大変な事で、おかしな出来事であつた。

数日後、幹道の向こうの山の兵器（被服）物品を盗りに来る地方人が居るのでこれを撃退せよと命令が出て、一個小隊で夕暮れ早い時刻に山へ登る。坂道幅五メートルぐらいに沿つて一列になり、着剣し銃に弾を込め待つっていると暗くなつたころ、三百人ぐらゐの地方人がガヤガヤと大騒ぎをしなから登つて来る。命令が出るまで撃つなど言われていたが、地方人がある程度登りつめたころ、隣の者と小声で「撃つか、やろうか」と話し合い、誰からとも無く一人が引金を引くと、命令を無視して各人がボンボン発砲すれば阿鼻叫喚、山の上の方に行く者、来た方へ逃げる者で大騒ぎ。隊員の中には頂上に向けて手榴弾を投げる者有り、今

思うと正気の沙汰ではない。

翌朝検分に行つて見ると、梱包の上で立膝座りで右手に筒の長いピストルを持った男が左耳から斜上頭の半分が吹つ飛んで即死。見た瞬間ギョツとしたが、腰を抜かしている者や放心状態の者を無理矢理集め、穴を掘らせ死体を埋めさせ、流血の坂道に土を撒き復旧させ、作業した者には品物を持たせ、二度と来るなど言つて帰した事も度々有った。

そうこうしている間に軍令で、これから各班それぞれ班員を出して被服庫（山）を守れという事で、各班の大部分は警備に就いたが私は班でただ一人残され、毎晩広い幕舎で独り寝ていた。ある日、鳥取県東伯郡出身の見習士官（鳥取県出身者は隊で二人だけ）が訪ね来て「松下よ、私は東伯郡出身の同郷であり頼みがあつて来た。聞いてくれるか」と言うので「何ですか」と問うと、「過日、隊長と争つた事でいつ隊長幕舎が襲撃されるか知れないと心配しているが、お前はどうかんだ」と

言う事で、おかしくもあつたが「今後何も行わない、かつての事は忘れてしまつたから安心して下さい」と言うと、「ありがとう、これで私の当面の責務が果された」と言つて帰つた。

また大変悲しい出来事もあつた。本隊の丘と炊事班（屯長の家の前が炊事場）の間道で夜間銃声（自動小銃）がしたので何かあつたのかと思つて起きてみると、誰か一人行方不明になつていてという連絡があり、内地から一緒に入隊した同年兵と分かり、四年兵、五年兵十人ぐらいで搜索に行くと、完全軍装しているので、自分も一緒に連れて行つて欲しいと言うと、「お前は駄目だ」と言われたが、既に軍装を整えていたし、同年時兵として落ち着いてはいられないと無理矢理に同行した。さすが熟練、動作は活発だ。いつ弾が飛んで来るか知れない夜間に敵索に進んだ先行古参上等兵が、二キロぐらい先の民家に脚を撃たれてうずくまつている行方不明者を見つけたが、軽金属板で脚の前後を覆つて仮手当てがしてあり「痛い痛い」と

呻いていたとの報告があつた。周囲を警戒しながら本隊に連れ帰つたが、ソ連軍使用の自動小銃(通称マンドリン)の弾が貫通してかなり出血している。傷口を縫うにも馬の手術針しかなく、衛生伍長が苦勞して傷口を縫い合わせたけれど衰弱が激しく、翌朝「お母さん」と一言残して亡くなつた。

全員で葬儀を行つたが、今でもあの丘の土深く眠っているかと思えばやるせ無。多分ソ連の斥候隊にやられたもので、ソ連兵を強く憎んだ。

数日後、状況の変化で、例の被服庫の山をソ連軍と共同で警備せよの軍令で私もその任に当たつた。お互いに警戒しながらいたら、ソ連の下士官であろう者が日本人に銃を突き付け大声を出しているの、どうしたかと聞くと、どうも酒が欲しくて持つて来いという事らしい。言葉が通じないので酒はここに無いと身振り手振りで言うと、今にも引金を引かん状態に「しばらく待て、ここには無いので本隊から取つて来るまで待て」と言つて本隊に大急ぎで帰り、こうした事情だから酒一

升出して欲しいと頼み、酒を受け取り持ち帰ってみると、二合ぐらい入るガラスコップを持って早く入れると威張つているので仕方なく注ぐと一気に飲んで「ナー」と私に差し出すので入れてやると、お前が飲めと言うのでチビリ、チビリと飲んでいると「スラーズ」と拳を出して言うが、私は手を振つて「ノー」一気は駄目だ、日本人は少しづつ飲むのだと説明しても中々理解してもらえず大変困つた。またソ連兵の一人が、所用あつて場所を離れる時は日本人も一人になれ、一対一でないと駄目だと手振りで知らせる。多分恐ろしかったのだと思う。また日本兵の持っている物は何でも欲しがつた。先ず「チャスイ、ニエツト」時計がないかとくる。「ニエツト」と言うと、「ピシビシ、イエス」万年筆が有るかとくる。「ニエツト」と言うと舌打ちして行つてしまう。私が仮設便所で大便をしていると、木の立壁に掛けていた将校用ベルトが向こう側へ静かに動くではないか。ハッとして己の手で掴み引くと向こうも強く引く。

尻を出したまま大声で怒鳴ると、やっと手を放したので胸を撫で下ろしたこともあった。

九月に入って軍令で、奉天鉄路学園にて武装を解除せよとの事で本隊が移動する事になった。それより前に、脱走するため屯長の息子に頼んで満服を作ってもらい地図など必要品を準備した。代償として山から運んだ新しい上衣、下衣、軍服、飛行服等多量に渡してあったので無条件で応じてくれたが、逃避目的を果たさず山を降りて学園に向かった。山を降りる前に現地除隊の許可が出て、何人かは除隊して満人になって生活する。負けた日本には帰りたくないからと割り切ってあつけない別れであつた。引率する将校は臆病で、ソ連軍の自動車があると草むらに皆を伏せさせたり、途中、小隊長ごとに小隊長を先頭に離隊する者が続出し、隊長、副官が馬上から制止の叫びも何のその、どんどん離れていった。興安嶺に行くと言っていたが、後日聞くと、寒さと飢えで多くは死亡したらしいとの事であつた。

### 武装解除

九月六日、学園にはソ連軍の嚴重な警戒の中、白旗を先頭に入園し、各自が先人の放棄した武器の山に次々と武装を解いて置いた。私は警戒兵に許可を得て触ってみたが、山積みの中の中には伝家の銘刀が多々あつた。短刀を一本くれないかと問うと、絶対だめだ、個人としてはくれてやるが、後で俺が首を切られる真似をして、自動小銃で威嚇するので傍観だけであつた。

私には三八騎兵銃と帯剣だけで解除も簡単で、調書に必要事項を記入して提出し何日かはのんきな日々であつた。転属前の原隊も近くに來ていたので原隊の班の先任者に挨拶に行くと、七十五キロぐらいに肥えた私を見て「気合いを入れられなくて良く肥えたなあ」と初年兵の時の様にかかわれた。

食料には心配なかったが、新しく出來た悪友を誘い、航空隊や戦車隊の幕庫の砂糖、牛缶（小木箱一箱）、征露丸（木箱一箱）、小豆（一〇キロ）、

米（若干）等を暗夜に紛れ盗み出し、隊からの食事は一切取らず、広い学園の空教室で悪友二人で汁粉を作ったり赤飯を炊き好き勝手をしていたが、これからどうなるのか、内地へ帰れるのか、悪くするとソ連の未知の土地で重労働をさせられるのかも知れないと考えたりした。我々には司令部からの命令伝達はおろか、国際法も知らなかったし知らされなかった。恐らく将校もすべてを知らせられなかったと思う。旧軍隊の階級で威張っているのも一旦解かれると弱いもので、地方一般の常識、仕組みには甚だ疎い様に思われた。その証拠に、部下に的確に説明も出来なく連隊命令も出さなかった。ただただ軍司令部の命令待ちの状態であったから部下からの人望も薄く、旧軍隊時の凛としたところがなくなっていた。ある日には野菜購入という事で五十人ぐらいが近くにある旧日本軍將校官舎付近に出かけ、そこで野菜を少し購入した後で官舎へ行って見ると、奥様と娘さん、当番兵だった人がそのまま同居していて、毎晩ソ連兵が

来るので女子はすべて断髪し男装し、娘さんと当番兵だった人は夫婦という事にしてあるとの事で、言葉では言い表せない大変な労苦をされたようだ。その後無事に内地に帰られたのだろうかとも今でも思う。

#### 強制抑留への途

九月十三日、ソ連軍の命令で集合し、氏名を呼ばれた者が五百人単位で一団体を組織させられた。今までの旧軍隊の組織、人間関係や団結をバラバラにしたのだ。そして新しい団体として「ヤポン、ビストラ、ダモイ」の声に内地への帰国希望を皆が持つて胸を弾ませ、持てるだけの大きな荷物を種々、各自工夫して作り出発を待っていた。列車に同乗させる軍馬の数の制限が示され、連れて行けない愛馬は可哀想だから一思いに自分達で処理する事に決まった様で、学園の隅の方で目隠しして四本の足を綱で縛り、一人がハンマーで眉間の急所を一撃し死なせ、四人で一斉に綱を引っばって斃れると一人の手馴れた兵がメスでアツという

間に腹から皮を剥ぎ肉を料理したとの事を後で聞いた。私達二人は遠くの教室からちよつと見ただけで、汁粉を作っていたので、明確には見届けなかった。いよいよ学園を新しい団体で発つ。

九月十七日の朝に整列していると、当番の者が馬桶一杯に煮付けした桃色した馬肉を持って各人に要るか要らないかと回っているが、馬に対する各自の思いがありなかなか手を出さずにいた。私は乗車すると肉は手に入らないと思ひ飯盒にいっぱい詰め、満鉄奉天鉄路学園を出発した。文官屯駅に四列縦隊で荷を背負つて進行中、満人の軒々に赤旗が立ててあり、満人は我々に石を投げ、警備のソ連兵には媚を売つて今までと打つて変わった態度を示した。我々は動ずることもなく、心では糞垂れと思えどただ黙々と進み、駅に停車している貨物列車に乗り込んだが、中には投石が頭や顔に当たり出血していた者がいた。負けた者の惨めさを痛切に感じ、満人の心変わりを恨んだがせぬ事である。これから強制抑留が始まるとは

誰も思いもよらなだが、定められた貨車に順次適宜に場所を選び、背負つた荷を敷いてその上に座る事にした。

貨車は六十トン貨車か、内地の倍はある大きさで、中央の入り口の反対側を壁にして中隊長、副官、将校連中数人が陣取つており、私は進行方向の後方の一番奥で小さな窓のある位置に気安い連中ばかり陣取つた。乗り込んだ時点では、ヤレヤレこれで内地に送つてもらえるの気持ちで、警備兵の「ヤポニーダモイ」も当初は気楽に聞いていた。落ち着き座ると早速生まれて初めて口にする馬肉、口にしてみると大変柔らかで味加減もほどよくうまい。悦に入っていると周りの連中が悔しがり、欲しい、くれと言うので「出発の時、何であれだけ沢山あつて余つたのを捨てたらしいのに、今更分けてくれとは聞こえないよ」と言つたものの、少しずつ分け与えると「こんなうまいとは知らなんだ、もう少しくれ」と言うが、残り少なくて再度配ることはしなかつた。あの時の馬肉の味は

忘れられない。しかし復員後は食したいとは思わないし食していない。

夕刻、列車がガタンと動き出したので相当距離走ったのではと寝ながら考えていた。夜が明けてみると少ししか移動してなくて、全員でなぜか大笑いした。幾時間かして動き出し、途中四平駅、新京（長春）駅で停車したが下車を禁じられていたので窓から外を眺めるだけで、ハルピン駅に着いてからは自由に車外に入りができた。貨車から降りて何本もの列車が並んで停車しているので、帰る時見忘れない様に位置を確認してから広い構内を歩き回っていると、構内柵の際で向日葵や西瓜、南瓜の種の炒った食品を満人が平台の上に並べ売っていた。ソ連兵が代金も払わずに驚掴みにしてポケットに入れ、二度目に掴み取った向日葵の種を私に「ナーワズミー」と言うので両手を出すと向日葵の種をくれたので「ありがとう」と言っ受取り、ソ連兵の見真似で少し口の中に入れて殻だけ吹く様にして捨てる。初めは実と殻が

一緒に飛び出したのでソ連兵も満人もクスクス笑い、そしてこうして食べるのだと何遍も食し方を教えてくれた。舌と上顎で二、三回で破り、殻だけ吹き出し上手に食べられる様になり、向日葵の種が食べられる事を知った。そして貨車に帰っていると警備兵が人員点呼する。この様な状態が二日間続いた。

貨車の中では、ハルピン駅から牡丹江駅を経てウラジオストク方面から帰国するのではないかと種々憶測話が出ていたし、ハルピン駅を出発、ソ連輸送指揮官が変わったらしいので早く走るだろうと話が出ていた。綏化付近ですれ違う開拓団邦人の客車を上空に発砲し停車させて、健康な男子を有無を言わず家族の中から連れ出し、輸送人員の補充をさせた。目の前で何も手出しできず悔しい思いで拳を強く握り締めるばかりであった。輸送中は暇を持て余し、雑嚢に日本紙幣を沢山持っていたので賭博遊びを始め、カブでにぎわった。敗けた国の紙幣が使えるのかどうか知れな

いので量も適當である。停車すると満人の子供がチャンチュウの小瓶一本や饅頭三個、栗餅三個を十円で売りに来るので、チャンチュウを買つて日本酒の様に飲んだら大變喉が焼ける様で大慌て、飲み方をよく知っている者に、一気では駄目、チビリ、チビリ飲むものだと言わり、よく買つて飲んだ。

栗餅の一包十円のを買つて温かいときはうまいが冷めると苦くなるので、冷めても苦くない上等な栗餅二十円ばかり買つていた。中には日本軍の兵舎から盗み取つたであろう乾パン一袋、するめ三枚もすべて十円で買い食いしていた。

十月十七日、終点黒河駅に着くと黒龍江の岸で露営、充分休む間も無く使役割当てが来る。体調の悪い者を残しプラットホームに滿州各地から略奪した小麦粉、豆類、米等の穀物、一袋九十キロの袋を積んだ荷を貨車から降ろし、一度ホームに高積みしてから船着場まで一袋ずつ担ぎ運ぶ作業だ。プラットホームに積み上げてある袋の中に砂

糖を見つけ、一袋を四角に積み上げた。中心が空いているので、その空き地で砂糖を別の袋に詰め替え、外側で信頼できる友に仕事をしている振りで見張りを頼み、上手に彼らソ連の上前をね、砂糖を二回くすねて何人かに分配をした。また小麦粉一袋十キロぐらいを運ぶ時、プラットホームから二袋担ぎ、途中で隊を横切る時一袋を上手に落とし、隊の者が素早く隠し、使役が済んだ後で分け合つて会食した。ソ連兵に見つかればただごとでは済まされなかつた事であつた。当日の夜は野営。江岸であり夜は寒く冷え、焚火を中心に輪になり、足を焚火の方に向けて寝た。翌朝一人の者が軍靴が焼け焦げたと大騒ぎ。足も火傷しているとの事で、よほど疲れていて熱い事に気が付かなかつたのだらうと思つたが馬鹿な奴だ。直ちに替わりの軍靴を都合して差し出すと大變喜んでゐた。すっかりせよと怒鳴りたくなる。

入　ソ

十月二十日、黒河の船着場に船の横腹に水車の

付いた運搬船が横付けされてある。過ぐる八月九日、国境の町黒河の日本陣地に不法にも突如、水陸両用戦車を先頭に侵入し攻撃された事を知り、黒河国境日本軍部隊の応戦、不意を突かれた時を思うと今の静けさは何なのかと独り思いにふけていた。指示に従い、その船に全隊員が思い思いの場所に座っていると、しばらくして船は水車を回転させながら流され、斜めに向こう岸に向って進んで行く。どんな町に上陸するのか心配であったが、私が心配しても仕方が無いと、船に積んであった厚さ十センチ直径六十センチぐらいの香りのする物が積んであったので、堅いが端を少しかじってみる。大豆を固めたもので動物の食糧であろう。空腹も手伝って懸命にかじった、うまかった。そうしている間に対岸に着いて、下船した所は隊長の説明で、ブラゴエシチェンスクで、ここで一泊する事になり隊所有の最後の米を炊き出し食事をし、世の行く末を考えていたら寝てしまっていた。早朝シベリア鉄道の駅へと行進。駅で乗

る列車はまたも貨車である。適当に乗り込んで一息ついてしばらくつらいでいると列車は東へと進んでいるので、車中話は、このまま東へ進めばウラジオストク方面へ行くと喜んだ。西へ進めばどこか分らない要塞工事をさせられるのではないか、北から東へ向うとやはりウラジオと一喜一憂したものである。

列車が西へ西へと行くころにはすでに諦めて、なるようになれと腹が据わり、のんびりとしてチタを過ぎるころ、ウラルの大山脈と森林の広大さに驚いたり感心したり。行先も知らされずバイカル湖畔を通過する時、警戒兵も逃亡が無いものが入り口も開放していたので大きな声で警戒兵を呼ぶと、銃砲が響き列車は緩やかに停止したので「ヘイ・カンボーイ」と呼ぶ。警戒兵がどうしたかと言うので、バイカル湖に足を浸けてみたいと手振り身振りで話すと、短時間なら良いと許可したが、いつでも発砲する構えの中、急いで素足になり、急な崖を落ちないよう懸命に早く降り、水

に足を浸けたら冷たい事、冷たい事、一分間も浸けておられなくて直ちに濡れたまま又崖をよじ登ってみると、後から後から他の者も降りているではないか。結局三十分以上停車したのではないか、バイカル湖一番浸かりで人生の一齣であった。バイカル湖を過ぎて少し寒くなっていたがそんなに感じなく、次第にシベリア鉄道の旅にも馴れ、昼食時は長い列車を停車させ各隊が昼食作り。私の隊は五百人分の飯を炊く者、味噌汁を作る者、焚木を拾ってくる者と作業分担し、限られた時間内に手際よくするよう指示する者がいる。私らグループはもっぱら焚木拾いで適当にサボり拾って帰り、次に行く所は人気のない林で煙草を吸い、よもやま話をして時間をつぶしていた。火だけは火事になると大変と皆が注意を怠らなかつた。誰が考えたのか、内面と外側に銀紙の厚い物で覆ったしつかりした物で味噌汁を五百人分一度に作り、出来上がると大声で知らせるので、慌てた振りをして自分の食器に入れてもらい列車に乗り食事を

していた。このころになると逃亡の心配がないと考えたのか随分と自由行動が許されていた。

駅に着くと、地方人の子供達がよく知っていて寄ってきて物を強請したり、油断していると荷物ごと持ち去るので大いに用心した。何日乗ったか皆目自覚がなくノボシビルスクで列車が分離され、モスクワ方面とウズベック共和国及びカザフ共和国方面の列車に分かれた。我々はウズベック共和国の首都タシケントとカザフ共和国カラカンド方面への列車に編成され、バルナウル駅でカラカンド行きとタシケント行きに分けられ、私達はタシケントに向かい、初めて目的地が判明した。

#### 収容所、強制労働

昭和二十年十一月一日、終着駅タシケントに着いた。ウズベック共和国の首都である。着いた時最初に出た言葉は「十一月だというのにすごく暖かい所だなあ」であった。寒いシベリアを三十日も通って来たせいであろうか。九十キロもある荷を担いでどこへ行くのか外景を見る余裕もなく、

歩くのに精いっぱい落伍しないように歩いていくと、ソ連兵が勝手に作った関所、日本兵の所有物を検査押収するところである。一列に並んで持物検査だ。検査兵の気に入った物や下着等を取り上げられるので、先に受ける者は後の者に託し、検査が済むと検査兵に見付からないように渡し合って、取られては困る物、大切な物は知恵を出し検閲を逃れた。しかし目的地までに何回となく突然に検問があり、だんだん持物が減っていった。

ようやく十一月三日、タシケント第二収容所に到着。第二番目に入った収容所であるのでタシケント第二収容所、通称ラーゲルと言うのである。歴史的なページが記された。どんな生活があるのか、今まで経験の無い未知の世界が待っているのだ。不安は無かった。不貞腐れてどうともなれ、どうにかなるだろう。収容所と言っても本来工場群の総合事務所になる建物で、煉瓦造りで平屋のコの字型になっており、急遽収容所になったもので、屋内はもちろん、外回りも配線は済んでいる

が電球もなく、あっても電灯が点灯しない。入り口が四カ所で、白壁の煉瓦も土である。敷地は百メートル・二百メートルの長方形。敷地の外側に望楼が四隅に建ち、昼夜警戒兵が武装して立哨し、望楼を挟んで左右それぞれ四重の鉄条網が設置された牢獄だ。鉄条網の中に入ると銃弾が飛んでくる。それ以外の敷地内は自由行動で、敷地から外出する時は衛兵所があり、衛兵司令（少尉）、下士官、兵と三人の内誰かに許可を得なければならなかった。この衛兵は工場群（ザボーダー）の中に駐在する小隊に所属していた。

出来て間もなし、広場も整地していない状態だが、建物に沿って五メートル幅の石を敷いた凸凹の道路は竣工していた。全員、隊長を先頭に衛兵所を通り道路に整列したところへ、ロシア人の所長（中尉）が朝鮮人（レーニン勳章を付けていた）通訳に頼り紹介及び注意事項の説明、特に逃亡、叩き合いの厳禁について、又二十日間の休養及び要求があれば申し出て下さい、との事。なかなか体格

の良い温厚な方と見受け安心した。

本日から二十日間休養し、後に定められた作業に就く事になつてゐる。取り敢えず現在の小隊ごと決められた室内で、定められた木製の二段、上下左右四人一組の寝台に持物を整理して一息ついて煙草を吸つてゐると、ソ連の背の低い地方人が隊長と通訳と一緒に来て、誰か電灯を付ける事の出来る者はいないかと言う。誰も自信がないのか返事する者がないので、しばらくして私が手を上げて工事しますと返事すると、ではすべて任せると決まり、一人では無理だから外に一人誰か手伝う者が必要ですよと話していたら山崎という上等兵が名乗り出てくれ、山崎さんの手伝いでまず配電盤と分電盤を調べるとすべてヒューズが取り付けてないので、例の背の低い地方人（クズネツオフという）に○Aと△Aのヒューズが必要です、調達して下さいと頼むと直ぐに持参したので、配電盤、分電盤に適切に取り付け、全室一斉にテスト点灯したら合格した。そこで休もうとすると、

外回りの鉄条網の柱にも間隔を置いて取り付けて欲しいと言ひ電球を持つて来たので確かめると、満州から掠奪して来た日本製で百ボルト用六十ワット。これを直列にし二個一組をそれぞれはんだ付けして、柱二メートル間隔に通電のまま取り付けよと言うので、山崎さんに、ここの電圧は二百ボルトで日本の倍ですよ説明し結線方法を教え、軍手二枚重ね、靴下も木綿と毛糸のものを履き、木で梯子を二つ作り、二人して二百ボルト活線に直列にした裸電球を感電しないよう細心の注意を払つて全部設置して回つた。大変神経を使い、大いに疲れたが、警備兵は物珍しく眺めていた。

この工事で、私達は電気関係の仕事がない時ののんびり寝台で寝そべつてゐる。

宿舎の前の庭の中央に水道管が一本一・二メートルぐらいの高さで裸で立つていて、洗濯もその付近で適当にしていた。こんな事もあった。古参兵らしい下士官二人が威張つて蛇口の真下で水を垂れ流しで洗濯しているのに、怖いのか、遠慮し

て誰も注意しようとしなさい。そこで私が行って「こちら！お前から何やってんだ、ふざけるな、己だけ良ければよいのか、独り占めは許されん、他の者が遠慮してゐるではないか、威張るな」と言つて水を止めると、私の劍幕に驚いたのか、下士官は青くなつて横の方へ行き小さくなつて洗濯してゐた。後、皆で譲り合い仲良く洗濯するようになった。翌日私の親しい仲間より、例の下士官が、啖呵を切つたのは何者だろうかと話してゐたと教えてくれた。私は誰彼の詮索なしにいつとはなく忘れてしまつた。

食事は、高粱の粥と黒パン三百グラムで、入所時は銀飯の山盛りを食べてゐる夢ばかり見た。米の飯が腹いっぱい食いたいとその事ばかり、情なくて涙も出ない日々が続いた。

私達電気関係者二人を除いて全員が割り当てられた箇所、中庭の庭園造り、庭園周囲の溝造り及び洗面所造りに精を出してゐた。

旧軍隊編成のまま室が決められ寝起きし、朝に

将校見習士官が週番将校肩章をして「起床」と声掛け起こし、少尉が宮城遥拝の号令を掛け抜刀して（少尉以上の将校は一カ月間帯刀を許されてゐた）廊下を巡回するので、一週間も過ぎたころ、多数の者から不満の声が出だし、朝礼を止めさせようということになり、明日巡回して来た時、刀を取り上げ折つてしまおうと衆議実行。誰が最初に取り上げかけたか定かでないが一時騒然となり、少尉は将校室に逃げ帰り、将校は将校室に集まり不穏な空気であつたが、しばらくして隊長が「明朝より朝礼は止める」と発言があり一応決着したが、将校の威厳は失われていつた。誰が衛兵に知らせたのか緊急点呼で、道路に四列に並んでゐると五列に並べ替えさせた。四列だと何回と数え、途中まで来て又初めから数え直す。ソ連兵の低度に苦笑いしてゐた。長い時間かけてやつと終つた。叩く真似して「タコイ、プラホイ、ニエツト」と皆に言つて帰つて行つた。

收容所で初めに困つたのは便所、男も女も同じ

所で行う。もちろん我々には女性はいませんでしたが、大きな穴（周囲コンクリート）に厚い木板を二枚渡し、それにまたがり大小便を行う事で、初めは馴れなく恥ずかしさが強かったが我慢も限界があり、段々と平気で他人と並んで行う事が出来るようになった。休養期間中、ソ連将校中尉と少尉が通訳を伴い来所し、「中尉は経理、少尉は労働担当です。まずソ同盟は働かざる者は食うべからずの原則がある、ヤポンスキも働かなければならない」と話し、これからの作業と作業成績の良いは者金銭がもらえるという説明がなされた。そして、各人の特殊技術等の調書を提出。私は別に技術を隠すつもりは無かった。面倒臭いので技術者として提出してはなかった。ある日、例の背の低いクズネツオフさんが道路を歩きながら「マーチシタ、マーチシタ」と節を付け大声で寝室まで呼び、入って来て「マーチシタ テビヤ マートル レモントブージ」と聞くので「ブーシ」と返事をすると「ノ、ナアデーパイジオン」一緒に行

こうと言って隊長室に連行し、隊長に早口のロシア語で話しかけるが隊長も理解出来ないらしいので「松下がモーターの修理が出来ると言っているので連行しても良いか」と言っていますと言うと、隊長は少し覚えたロシア語で「ハラシヨ」と許可されると、私を引つ張るようにして「イツシヨアジナーコパイジオン」と言うので山崎さんと呼んで、昼食前で腹が減っているとと言うと「ニチボウ、ラポートカンチャイ パトン クシクシムノーガ」と強引に急いで二人を案内した所はロシア式黄色で酔味のあるキャベツの漬物を作る作業場で、上部の三枚羽根ペラを下のベルト式の伝動裁断機で、四つ切りにしたキャベツを上部に入れると小さく裁断されて向こう側の漬物タンクに入る仕組みのモーターが動かないので修理出来るのか、早く稼働するようにしてくれという事だ。ベルトを外しモーターを調べるとすぐ不良箇所が分った。心配顔で見ていたクズネツオフが私に「ポニマイ」と聞くので「ポニマイ」と言う「ダワイ、ビス

トラ、レモント、ナーデ」と急がせ、戸板を持って来て三馬力のモーターを乗せ、私と山崎さんで運べと言うので「アノクダー」と聞くと「ジェーシャチ(十工場)」と言い、重たいので「スコリカ、クダー」と聞くと「シチヤス(もう少し、近くだ)」と言うがなかなか工場に着かない。腹は減って手が疲れ一旦降ろして休むと「ダワイダワイ」と急ぎ立てるので難儀して、どうにか一キロぐらいの工場にたどり着いたので昼食に帰ると言うと「クウシストイ、ラポート、カンチャイ、クシクシムノーガ」と言っただけで修理を急がせるので工場のマスターに言っただけで道具を借り、モーターの軸受けメタルが摩耗しているのを解体、古いメタルとローター(回転子)と両カパーを隣の旋盤工場(九工場)のマスターに作製伝票を記載してもらって新しいメタルを摺り合わせ修理が済み、試験検査も完全。山崎さんは修理した経験がなく手伝いもできないので結局私一人で作業した為時間が過ぎて、付人のクズネツオフは地団駄を踏み、早く早く急ぎ

立てるのでキャベツ作業所で組立て、可動した時はくたびれてしまったが、作業している若いソ連の娘が多勢代わる代わる寄って来て「ヤポンスキー、シバシーバ、オーチンハラシヨ」と言う。空きっ腹にキャベツを食したら甘くて美味しいのでガツガツと口に入れていると「ハラシヨ イツシヨワズミ」とキャベツを持って来て好意を示してくれましたので疲れも取れたような気がした。が、腹が減っているのに変わりなくラーゲルに帰ると言う「山崎一人帰れ、ラーゲルで食事せい」と言い私だけ引つ張って行き、ロシア人食堂の同伴テーブルに座らせ食べ物を注文して私に食事しなさいと言う。大きな素焼きドンブリにロシアビールのなみなみと入ったのを私に飲めと言うので、ビールは駄目、アルコール類は收容所長から許可されていないので「ニハラシヨ」と言っているところへ收容所の衛兵司令が入って来た。これは大変悪い所を見られた大失態、瞬間「仕舞った」と思いながら起立敬礼すると「ニチオーニチオー」

と私に言い、同伴のクズネツオフに何か早口で言い合っていたが、司令も「ノナーデ」と言っても事もなかった様に帰って行った。後でえらい事になるぞと覚悟した。しかし腹が減ったには勝てず、早速ロシア料理（黒パンとスープとトウモロコシを軟らかく煮たもの）を初めて食べていると、周りのロシア人は日本人が珍しくて黒パンやビールを次から次と持って来て驚くほどの好意を示してくれるので「シバシーバ、シバシーバ」と言うが、そう食ったり飲めるものではない。でもビールはドンブリで三杯か四杯飲んだかな（日本のビールのようにうまくなく水臭い）。折角だからもらった黒パンを紙袋に入れクズネツオフと一緒に帰り、山崎さんにお土産として黒パン全部差上げたら大変喜んでいたし、周りの者達が吃驚し羨ましそうにしていた。山崎さんは秋田県出身で唄の上手な事より心の良い人だと一段と好きになった。

ビールの酔いは歩いて帰るうちに覚めていた。隊長が呼ぶので隊長室に入るとクズネツオフが隊

長に向かつて、自分の首に人差指を丸めて弾きボン音を立てて「ピーワ、ムノウガ、ピーチ」と言っているのだからこれは大変だと考え、隊長が言っている意味を知らないのだから「ビールを一杯飲んだ」と自慢しているのですよと誤魔化してその場を逃れたが冷汗ものであった。

二十日間の休養（内実は環境の整備である）が終ったころには荒れ放題の中庭も見違えるほどに立派な公園に変化し、側溝は適当な勾配に仕上がったり水も順調に流れ文化的になり、公園と鉄条網の間はバレーボール場になったが、寝室の方は大変大きな南京虫が木の寝台の木の合わせ目や白壁の土の穴に住み、夜に人の血を吸いに出て来る。時々さそりがはい出て大騒ぎする事が度々。休日には寝台を外に出し南京虫退治におおわらわ。幸いに私は神戸育ち、南京虫には免疫で何の事もなく平気であったが、同室の者で顔をかまれ一晩で顔が変形した者もいた。痒い事に閉口していた。かまれるからと外で寝る訳にはいかない。

二週間ぐらいして他方面から転入者が何人か有り、中に体格の良い頭の禿げた者がいて年配者と思ひ、先ずお前は何県出身かと聞くと「鳥取県です」。鳥取の所はと更に聞くと「西伯郡大篠津村」と言うので、俺は彦名村である。歳は何歳かと聞くと二つも年下であり、親代々二十歳ぐらいではげる家系で、親父もこの通りと頭を撫で笑うので気に入り、我々のグループに入れた。安田さん、民間人で北朝鮮から拉致、強制抑留されての収容であることが判明した。

作業隊が決まり就業する。各工場の作業内容説明が簡単になされ、安田さんは健康で体格も良いので十一工場の原銅線直径十二ミリぐらい、一輪九十キロを貨車から降ろし機械付近まで運ぶ六人八人の作業隊で重労働である。私は十一工場の十二ミリの銅線を目的の太さにする機械の操作で、機械の何箇所かに電線を通して変化させるダイスが有り、機械は石鹼水が溜池に満たされ、順次大きいダイスから小さいダイスを通り、最後は目的

の太さのダイスを通り右端の回転ドラムに巻かれて仕上がる。割合単純で昼夜兼行二交替で、一台の機械を日本人とロシア人が八時間交替での作業隊であった。二日目の夜、作業していると、十工場の工場長が物凄い勢いで大声を出し「デビアヒーツウリ」と人差指を顔の前で前後に振りながら私に近寄って来たので「チオムニヤ、ニズナイ」と両肩を上げ両手を広げていると「ニエニエ」と頭を振り慌てて帰り、しばらくして今度は労働担当の少尉を伴い、何か不満を力を入れて言っているのによく聞くと、少尉に向かって「松下はエレキ、マンチオール（電機技術者）であり当然十工場の作業に従事するものだと思っていたのに、何でこのような作業をさせているのか」と強い剣幕で、十工場で働かせて欲しいと要請している事が理解できた。技術調査時には特記しなかった。作業隊編成の時深く考えていなかった。二十日の休養時、キャベツ切機のモーターを修理した技術を見て、当然この者は自分の工場に配置されるも

のと思つていたら私が見当たらないので一日中探し回つていたとの事。労働担当と工場長の談合が済み、労働担当少尉君は「君は明日から十工場で作業するように」と告げると工場長も笑顔に変わり、私の手を握り「プライナ、プライナ」と大喜びしていた。

翌朝早々に労働担当と経理担当が収容所に隊長を訪ね来て私を呼んで隊長に「ハラシヨラボーテ イゼンギムノーガ」と作業変更の説明をして後、特別に十工場に案内し工場長に紹介。昨日の約束を実行したことを話していた。工場で働いている者はロシア人、トルコ人、ウズベック人で、臨戦体制で全員徴用。マスター老夫婦はモスクワからで、三年すると六十歳になるのでモスクワに帰つて年金生活をするのだと言つていた。

日本人は当初十五人であつた。錦織伍長が作業隊長であつたが、電機の事は長い軍隊生活で白紙の状態。もう二人の高橋伍長と岡田上等兵は大変器用で、マスターに教わつて作業をしていた。

一番若い私が遅れて編入された上、職場のロシア人達が前に知つていて「松下、松下」と親しくするのでなぜかと異様な目で見ていた。事務員のニユーセンというロシア美人が私にチョコレートをくれたり、ウグロウというロシア人が葉タバコや巻きタバコをくれるのが羨ましうであつた。作業はマスターが各人に指示し行い、私には「お前の技術はモーター修理でよく分かつている、電機の仕事は置いといて、二十二工場の近くに真鍮板がある。それでバーブシカ（マスターの奥さん）の小さなバケツを作つて欲しいと言う。先ずブリキ屋さんだ。バケツ作製が済むと、七十七工場の横に一号旋盤が置いてあるから二人で持ち帰れと言う。持ち帰ると、これを据え使用できるようにすること、今度は旋盤工だ。でも仕方ない、これも作業のうちと割り切つて指示された仕事をこなしていったので重宝がられた。マスターからは、

自分の庭でソ連は自由に煙草が作れるので自家製品の煙草を袋に沢山くれたり、自家製のパン生地

を焼いた食品をくれて大変優遇され信頼された。

一カ月が過ぎ、経理中尉（別名ゼンギ中尉）から個人個人に給金が渡された。私は軽作業であり百五十ルーブルを「ハラシヨ・ラポータ」と言つて渡され、署名して受け取った。安田さんは重労働で二百ルーブルであった。給料について詳しく説明を聞くと、私の一カ月の賃金は休業せずに七百五十ルーブル以上で、当時としては結構な高級だと言う。軽作業者は最高百五十ルーブル、重労働者は最高二百ルーブルで、収容所内での食料、水道料、電気料、嗜好品代等を差し引くが、百パーセントノルマに達しても作業単価の低い作業者には賃金が出ない。一人当り約五百五十ルーブルを必要経費に充当するので、このようになると説明された。

支給された給金で煙草三十ルーブル（赤い札）で一カ月間吸える。その他、杏、トマト、黒パン、小豆、砂糖等を買っていて、もらった金を貯める事はなかった。次にもらうまでには綺麗に使った

り遣ったりした。休日にはグループで運動場に毛布の日光消毒を兼ねて四角に壁を作り中に集まり、情報交換と会食を開いたりした。私の勤務工場の前の七十七工場の紡績工場で糸をもらい靴下を編み、一足三十ルーブル、手袋一双二十ルーブル、レース編み手袋二十ルーブルで売却し小遣い儲けをすると、他の者で器用な人は編み方を覚え、作業から帰ると寝台の上で編み物内職に励んだ。遊ぶこととて特になく、娯楽の囲碁、将棋、麻雀、使用するものはすべて手製で、器用な者がいて自由時間に覚えた。そして夜の更けるのも忘れ夢中にさせた。

収容所内はそれなりの自由があったが、一歩外に出ると警戒兵付で、工場に行く時も衛門から二列縦隊で前に二人、後に二人、銃剣（銃に付いた三角の剣）の先で尻を突き「ビストラ、ビストラ」とやかましく急ぎ立てられ、突かれた者が「うるさい！痛い」と怒鳴ると「チオチオウルガイ」と言つて工場まで追及し、到着後は外で待機し、

工場の中は自由に動作が出来ても一歩外に出ると必ず付いて来て逃走するの用心していた。だが逃走する恐れがないと思ったのか警備隊の方針が変わったのか知らないが、いつの時期か定かでないが警戒兵が付かなくなり、日本人だけで通勤できた。

三カ月ぐらいしてからか、カーベルザボーダ(電線工場群とでも言うか、それぞれの工場が一区画に集められたもの)で働く地方人が日本人の我々を見ると、二本指を井型にして「ワイナプレン」「ワイナプレン」(戦争捕虜)と言うので激しい憤りを覚え、早速収容所長に「我々は戦争捕虜ではない。連れて来られた日本人労働者である。なぜ一緒に働いているソ連の労働者は捕虜だ捕虜だと言うのか、かかる事態は、それでなくても日本人の労働意欲を阻害する事になる」と抗議すると、初め無視されて罰を受けるのではと覚悟していたら「よし分った、早速手配して言わせないようにする」と約束してくれた。三日ぐらいすると少な

くなり、一週間もすると完全に捕虜と言わなくなった事もあり、抗議して良かったし、私達の心情を大変理解して下さった収容所所長の人柄を見直し、尊敬した。筋は通すものだと言信した。

しかし就業当時は働く気がせず、何でロスケの為に働かねばならないのかと、ダラダラと働いている振りをして仕事を怠けていた。一般にこうした雰囲気では活気はなかった。こうした状態では困ると労働担当、経理担当の将校と所長が一等通訳官を連れて来たりして、何とか作業能率を向上させてくれないか、今我が国ではスタハノフ運動(生産性向上運動)が始まったので、このザボーダの細かい糸のような電線で編んだ優勝旗の争奪戦で優勝すると名誉ある優勝旗と賞品が与えられる、優秀な日本人に是非取ってほしい、協力して欲しいと申し入れがあり、当初は何を勝手な事を抜かすかと大多数が思っていた。しかし人望ある所長が熱心に心中を訴える誠意に、有志で計り「よし、それだけ頼まれりや日本人の優秀な腕前を見せて

やろうじゃないか」と煽動すると多数の者が賛同。

「よし、やってやろう」という事で作業に熱が入り、とうとう今年度は日本人労働者が優勝して、二人でようやく持つていられる大優勝旗が収容所に入り、所長から日本人代表に渡されて「伝統ある優勝旗が収容している日本人に渡るのは地元は残念であるが、日本人がこれまで意欲を出して優勝された事は大変嬉しく、榮譽を讃えます」と通訳を介して挨拶があった。皆でなぜか知らないが両手を挙げ万歳をした事を覚えている。

このころ、収容所の片隅で四、五人の者が「赤旗の歌」を練習しているのが気に入らないのでグループの者を集め「日の丸の歌」「白地に赤く日の丸染めて嗚呼美しくや日本の旗は」とわざと大声を出し対抗した事もあった。収容所内に食堂がなく、ロシア人食堂を半分借りて食事を取っていた。不便である上、食堂があれば多目的に使用できるので、収容所内に高さ約二十メートル、幅約四十メートル、長さ約百メートルの建物を硬質煉瓦で

日本人だけの手で造った。大きく立派な炊事場はもちろん、舞台付きの食堂が竣工完成した。これからは収容所から遠い所まで行かなくても食事が出来る喜びがあった。夕食後はここで楽隊の練習、踊りの練習、芝居の稽古がなされた。楽器は大太鼓、ギター、マンドリンは手製。その外ハーモニカ等で演奏。演劇の衣裳は私が満州文官屯の山から持って来た日本の男女の着物等や現地で作った物で、舞踊の衣裳は黒鉛の入った袋を持ち帰り、洗うと真っ黒い汁が出るが終りには真っ白な布袋になった物を裁断し、手縫いしたものであった。

この間、所長に申入れ「ビールを甘味品として出して欲しい」と言うのと所長は快く飲酒（ビールのみ）が許可され、月二回、飯盒の中蓋で一回分が半分ぐらい、ビールの飲めない者は配給の砂糖を溜めた分と交換していた。

こうした事のみでなく辛い事もあった。夜、寢室から二百メートル外の便所へ行こうと建屋から外に出た時、正面の公園広場で何か一生懸命に草

を摘んでいる者がいるので、この夜中何をしとるのかと聞くと、腹が減って寝られないので、この草は日本では牛や馬に食わせる物で、この草を二〜三回湯搔いて固く搾り食するのだと悲しい顔で言うので少し待たし、部屋に帰り三十ルーブルの札を一枚渡し、明日職場の地方人に頼んで黒パンでも買ってもらい食べなさいと言った出来事もあった。今では考えられないことである。

翌年も優勝を勝ち取った。偉大な貢献、日本人の魂と技術の寄与である。後日耳に入った事であるが、この時点でウズベック共和国では第二收容所の日本人は帰国させると決めてモスクワに問うと、駄目だ、今優秀な日本人を帰還させるとカールザポードの生産が急低下するとの理由で「ダモイ」が延期になった事、スターリンの糞垂れ、覚えとれと腹が煮え返った。

メーデーには三日間休業で、この時期になると收容所の衛兵下士官が来てバレエの合間に「ヤポニー、ダモイ」と教えるが、メーデー休日が過ぎ

るとダモイの話は立ち消えて、又嘘だったとガツカリもした。作業は八時間労働で、これは守られていた。週六日の就業日のほか收容所内で慰安趣味を楽しむ事で、芝居や楽器（大太鼓、ギター、マンドリン、ハーモニカ）でそれぞれグループで稽古をしていたが追々と専門化し、楽団、舞踊、演劇の部が結成され、休日には食堂の舞台で稽古したもの全員に披露し、異国でお互いの心を癒し合った。七月ごろに郷里への手紙を申し出て許可も出て、ウラジオストク気付で、作業内容、詳しい風土、場所を書かないハガキに、簡単に寒さ暑さや元気で頑張っている事を書いて出した。必ず親元に届く事を信じながらである。

私は「日本の四季」という野次喜多道中もどきの演劇で、「むくら桜」の曲で日本橋から始まり京都を通り過ぎ馬関（下関）まで延長させ、そこで「手品やるある、皆くるよろし」の曲に、チャイナ風の格好で足の上で棒の皿回しの役を演じたのを舞踊部の責任者が見染め、是非にと舞踊部に入

った経緯があつた。演劇、舞踊、楽団をまとめ、全タシケント収容所の指導劇団として毎週、舞踊、楽団は発表し、演劇は月一回披露。団長は澤田大尉軍医で脚本演出をされた。楽団は収容所長の家族、工場長の家族を含めての演奏会を催し、日本の童謡や唱歌を演奏すると、所長の小さな子供達が歌詞は知らないのに音程だけで日本の歌詞に合つた踊りをして拍手喝采で、国境、民族を越えての団樂だんらんもあつた。又、舞踊部はアクロバットや群舞を披露し賞賛された。しつかりこの地方の風土に馴れ、言葉もロシア語の単語で大抵の話は通じた。ウズベック人のウマールさんとは仲良くしてもらい、お金を渡し黒パン（配給券で買うと二キロ六ルーブルする）を安いので彼の余つた券で買つてもらい、杏、向日葵の種、トマト、クルミ等も買つてもらい、収容所内でグループが会食を度々した。ウマールさんにはお札に手袋や靴下（ソ連には靴下が当時なかった。四角い布を足に巻いていた）をお礼として差上げたり、一個三十九

ブルで売っていた私が作ったライターを差上げると大変喜んでいた。彼はとても性格的に物静かで大人しく心優しい。私より三つか四つぐらい年下の男性であつた。又、私の勤務工場の前の七十七紡績工場には劇団で知り合つた四国出身の仲良しの前田君がいて、勤務時間中でも私は自由に出歩く事が出来たので七十七工場に入り、前田君の作業場に行くと前田君が「松下、煙草代をくれ」と言うので三十九ルーブル（赤色していた）の札をくれてやると女工が見ていて、前田君に、「お前は松下を脅迫して三十九ルーブルの大金を取つたんだろう」と詰め寄るので、前田君は病気で休みお金がないので仲良しの私にくれたのだと説明すると納得する場面もあつた。

女工達（ウズベック人）は眉が中央で繋がっているのかと聞くと、繋がっているのは未婚者で、結婚すると眉が離れるのだと教えてくれた。私と心安くなつた二人の女の子は頭が良く、日本の五十音の平仮名、片仮名を三日ほどで覚え

てしまった。驚いたね。そして、何で紡績を欲しがるのかと聞くので、手袋と靴下を編んで「パジャールスタ」と差出し、これになるのだと内緒で小声で話すと大変喜んでいた。仲良しになっても恋愛感情はなぜか起きなかった。お互い若いのに不思議なことであった。ロシアでは当時、恋愛は自由で、私も「ヤ・オワスリュウヴリー」と迫られた事があったので、男女関係は刹那的で開放的でもあった。

十工場で内直径一メートルもある大型電動機が焼けて緊急巻き替え工事が入り、マスターが「明日午後六時より翌午前三時まで松下とウズベック人の女性の二人で夜間作業を、昼は日本人二人が連続して大至急、ナチャーニクの命令だから仕上げてくれ」と作業指示があった。夜間、若い女性と二人で八時間も作業する事に若干の羞恥はあったが、日本人の私を選び信頼する姿に応えなければならぬと決め、その時刻に独り出勤すると、工場門前の潜り戸の傍らに年配の女性がライフル

銃を持って立哨している。「ドラスチイ」と声かけると「ドラスチイ」と答え、潜り戸を開けて入れてくれ、自分も入り戸を閉め入口で銃を持って座つての夜警である。相手の女性は既に出勤して笑つて迎えに来た。それを見ていた夜警の女性が私に「ビエロイ、マダーム、ハラシヨ」と少しからかうように言うので私が「ニチオー」と肩をすばめて言うと、何か呟いていた相手の女性も十工場勤務で知った顔でお互いよろしくと挨拶して、台に乗せてある電動機の中に挟み両脇に座り、先ず作業の手順とテープ巻きについてしっかりと話し合い、一息してドラムに巻いてある太い銅線に布テープを相互に巻きながらコアの溝の中に納めボールごとのコイルを作り、その先端をテーピングする。お互いの呼吸が合わないと同形のコイルにならない。細部についてその都度相手の方に行き、手を添え注文を付け話し合いの作業に手間取り、初日は私の予定よりははかどらなかつたが、明日昼作業する日本人の技量を推しはかり少なめに止

めた。彼女は一ポール出来るると休息しようと申し出て、用意した食べ物を出し、私にも「ワズミ、パジャアルスタ」と出され、ご馳走になったりよもやま話で急速に気安くなった。名前は忘れたがポッチャリした性格の良い美人であった。なぜか特別の関係にはならなかった。昼夜五日ぐらいで捲き終わり、最後の結線は彼女が知らないと言うので私が結線、はんだ揚げしテーピングして我々の作業はすべて終わった。最終の夜、二人で固い握手をし、抱擁し互いに達成を喜び合った。夜警の女性は寝たまま。私達が作業を仕舞って帰るころ起きて私達を送り出し、鎖錠して帰って行った。翌朝出勤してマスタールに作業報告すると手を握り、よくやってくれた、思っていた通り実行してくれてありがとう、予定より早く出来た、お前さんたちのお陰だ。そうして、一緒の彼女はどうかだったと少し首をかしげ冷やかすように言うので「ハラシヨ、ラボータ、イツシヨビエロイ」と言うので「プライナ、プライナ」と言い、それ以上は聞かなか

った。その翌日マスタールが呼ぶので事務所に行くのと、貨車タンクから工場へ送油する五馬力の電動機が駄目になったので「アメリカン、マタイ、ブージ」米国式の捲き方で修理出来るか、修理してくれと言われるので、回転は八ポールで良いかと問うと「ノ、ダー」それで良いとの返事に、早速コイルの巻形を木で作りコイルが同寸法になるようにする。出来たコイルを溝に納め最終結線する作業をマスタールと女性技術者が真剣な眼差しで観察していた。日本式の電動機の捲き方が参考になった様だが、出来上がりは綺麗だが見た目より実際の業績が問題で、早ければなお良いとの考え方に一理ある事を学んだ。コイルのニス漬け、乾燥、組立、回転試験して合格。電動機の胴に「ヤボンスキー、マツシタ、マタイ」とマスタールが書き入れて、据付現場で正式に油を送る状態に立会い「プライナ、プライナ」と企画通りを納得していた。

一九九〇年、第九回「日ソ不戦の誓い」タシケント集会分科会交流に参加し、現地を訪れる機会

があり行つて見たが未だに動いていた。多分亡くなつていられるかも知れないマスターに、未だ仕事していますよとモスクワの空に向つてつぶやいていた事を思い出す。

収容所内に風呂がなく洗面所で体を拭いていた。月一回、収容所からかなり離れた野原にバーニヤ（浴場）があり、作業隊ごとに衛兵が案内して着衣の熱気消毒兼シャワー室のある建物に行く。シャワー室に入る前に全衣服を丸い輪にした八番鉄線に吊るし熱気室に入れ、裸で室内に入ると壁に約二メートルぐらいの高さにシャワーの口が固定し、一列七個と思つたが正確ではない。初回は時間があると思つて急がずにいるとシャワーの水が止まつて出ない。慌てた。水は五分間の節水で、素早く洗う必要を知つた。だが余り慌てて洗い終わつても熱消毒の被服が熱くて直ぐに着られず裸で待たなければならず、二回目からはシャワー室に入ると石鹸を体に擦り付け、水の出るのを待つて一気に流すことの余裕も出来て、不十分である

が体を洗つた気がした。バーニヤとは浴場でなく衣服の熱気消毒が目的との事でした。日本人に合う風呂に入りたいと我々グループで常々考え話し合つていたところ、他工場勤務の私に好意ある者が「松下さん、○△のところは五右衛門風呂がありますよ」と教えてくれたので、衛兵司令に交渉して八人で取りに行く許可を得て釜を持ち帰つた。なぜ五右衛門釜が一つ放置してあつたのか不思議の一つであつた。洗面所の裏側に石を積み焚口を造り、その上に倒れないように堅固に釜を据え、釜に入る石段も造り水を汲み入れ火を焚き、初めて収容所で急造の念願の風呂が出来た。屋根はなく野天風呂、入浴順は敬意を表し、釜を発見、教えてくれた人が一番風呂で、グループが順に入り悦に入つていた。他の者が入浴させると言つても駄目、独占状態でも何回となく頼みに来るので、釜の水溜、焚口、当番、焚き木持参と、何かの代償を要求し、入浴出来る者は僅かであつた。風呂番はグループの者で早く作業から帰つた者が当た

った。しばらくすると、何とか皆で協力するから入浴を許可してくれないかの申入れがあり、各作業隊が順次当番し、全員利用できるようになった。しかし、入浴するのが一人ずつで時間がかかり、到底全員がスムーズに入れないので有志が集まり、本格的屋根付で一度に数人入れる浴場を造る事になり、設計の得意な者の設計に基き、一枚一枚、各人が隠し持ち帰った耐火煉瓦を積む者、脱衣室を造る者、焚口、対流の鉄板部を造る者、屋根を造る者、総力を挙げ終業。ただし鉄板部は溶接もあり、内密に作業場での製作の努力が実り一カ月で立派な風呂が出来上がり、皆で万歳し喜び合った。収容所長にも見てもらい「日本人のバーニヤ、タコイ、首まで湯に浸かるのです」と言うと、笑いながらウンウンと首を振っていた。それから後は入浴に並ぶ列の心配はなくなり、作業が終ってから順次利用し、楽しみが増え満足であった。

森の都タシケントのカーベルザボータは市の中心よりかなり北の方に位置し、雪を覆った天山山

脈が眺められる位置で、その北端に第二収容所があり、三月になると辺り一面一斉に杏の花が咲き、日本の桜の花見時の様子に辛い心も弾んだ。ザボータ内にある杏の木に登って日本の倍もある大きな実を取る楽しみもある。これも日本の倍以上の桑の実、赤と白の二種あり。赤色も紫色にならなくても熟れていて甘かった。白も同じで、二抱えもある大木が幾本も植わさっていた。五月になると真夏の温度。屋外の日光で焼けた金属は素手で持つと火傷するほど外気温度は高かったが、木陰の下や建物の中では涼しかった。

十月中旬から十一月中旬までは日本の梅雨期のシトシト雨でなく雨量の多い強い雨が降り、泥濘で歩行に難儀した。軍靴も傷んで修理班も忙しうであった。雨が止むと雪となる。今年は三十七センチ、昨年は六十センチ、一年交替で多い年と少ない年があった。日本の私の故郷と大差はなかった。寒度も厳寒だが我慢の出来ないほどでもなかった。

三年目になると工場当局から機械の改善、安全装置、作業手順の生産向上についての提案、具申をしてくれと申し入れがあり、度々工場ごとに作業が終ってから会議が設けられ、日本人側からの提案を熱心に聞き入れていたり、改善提案について金一封が授与されたりした。そうした状況で委員として「一、かかる会議を時々持つ事 一、各工場の作業隊ごとの各人のナリヤード（一日の作業パーセント表）を毎日必ず渡してくれる事（中には狡い当局の責任者が出さなかつたり、ピン撥ねしていたので二回摘発を申し入れ、後日その責任者二人は餓首された） 一、土曜日午後八時、タシケント市街中心に外出、遊びに行く為のトラック三台、送迎に出して欲しい」と三点申し入れして、工場群首脳部の長（ポリシヨイナチャーニク）の確約を取り付けた。当初一〜二回は守られたが直ぐ怠け、ナリヤードを出さなくなる。出ない工場があると次の日は所長に「労働者の国ソ連は民主的であり労働者の権利は守られる国である

と信じ、約束したナリヤードの出ない作業は中止しストライキを行うがどうか」と質すと「ブライナ、ダワイ」とストの許可が出た。ソ連の民主的自慢を上手く逆手に取って要求獲得のストライキを二度行つた。それ以後必ずナリヤードは提出された。提出が遅れた時にはわざとじらし衛門の内側で並んで待機していると、工場の責任者が衛門の外で内に入る事が出来ないので「ダワイビストラ・ヤポンスキーダワイ」と大騒ぎ。内から「ナードナリヤード」と押し問答。責任者が衛兵に掛け合っても衛兵は「ヤーニズナイ」と知らん振り、門を開けてもらえないのでやむなく工場へ帰ってナリヤードを持って来るとようやく開門、出発。責任者ぶりぶり文句たらたら。外出用トラックの運転手付き貸与も上手にいつて夜十二時まででは中心街で自由に遊べた。最初はソ連兵が点呼していたが二回以来は日本人の報告で済んだ。店に入るとロシア人が「イジスターヤポンスキー」とかなたこなたから声が掛かり、椅子に座るとビールや

ウオッカをご馳走して日本人には好意的であった。

三年目のメーデー時、衛兵司令が寄つて来て「スコーラ、ダモイ」と言うので「又騙すのか」と詰めると「今度は本当だ」と真剣な顔で教えるので、いよいよ日本に還れるのかと思つた。正式通知はなかつたが誰言うとなし噂が広がり、全体で何か催しをしてはという事で実行委員会が計画が立てられ、收容所全域で「おでん」「しるこ」「ぜんざい」「串だんご」「餅」の屋台を造り、飾り付けもにぎやかに食堂では音楽演奏、舞台では舞踊や劇を演じて入所以来初めての大きいわいで、日本様式に所長以下、衛兵司令、労働担当係少尉、經理担当係中尉、工場長も来賓として催しに参加、珍しき、驚き、歎談し感嘆して大成功であつた。收容所全員が心から楽しんで休日であつた。生産委員で工場を巡つて帰つて事務所に行くとき、既にハルハット変電所突貫工事の爲第五收容所への転属命令が出て、第二收容所からの転出者名簿が出来ていた。私が不服を言うと、お前の帰つて

来るのを待つていたが政治将校も来てビストラ転出者名を報告せよと強く厳しい命令で、いる者で決定をした。止むを得なかつた。了解して欲しいと頭を下げられるので了承して名簿を見ると、医務関係、電機修理、電気溶接、靴修理、被服修理、理髪、炊事関係の若いエキスパートを中心に、煉瓦積み経験者総勢七十人余りの中で私も入つていた。選出についてあえて不満は言わず自室へ帰り転属準備をしつかりと整えた。親しくした同郷の安田君達は七月には帰国するだろう、故郷に帰つたら私の家を訪ねて、松下は元気で頑張つてゐる事を両親に伝えてくれと頼み、三年余り作業した工場に行き、工場長、マステル夫妻、事務員、技術技師、工員に、急にハルハット変電所の建設に明日出発するのでお別れの挨拶に来たと各々手を握り、今日までのお礼を言うと「松下、お前は優秀な技術者だ、いつまでも一緒に仕事をしたかった。もう会う事もないだろう。松下の事は忘れない。どうか身体に気を付け病氣しないようにし

て任務を全うし、親兄弟の待つてゐる日本へ無事帰られるよう念じている」と涙を流し、餞別も頂き、マスターの奥様、バーブシカ（お婆さん）は齒のない口で、どこそこの共和国は何々が安価だ、この駅は何々が安価なので必要ならそこで購入する事など教えてくれ、旅する我が子に言うごとく親切に私を抱く様にして話して下さり、皆で門まで手を振りいつまでも別れを惜しんだ。その別れが本当に辛く、後ろ髪を引かれる思いで振り返り振り返り手を振り、姿が見えなくなる所まで……。今でも思い出すと涙が出てしまう。

#### 收容所転属

四台の大型貨物自動車に乗り第二收容所の戦友達が手を振り、本日までお世話になった御礼の敬礼をして出発、お互いの目に涙が光っていた。着いた第五收容所では先に入所している者達が迎えていて、当收容所に第二收容所澤田大尉軍医以下七十人、ただいま到着しましたと報告がされ、澤田軍医と中野さんは医務室へ、他は各自割り当

てられた宿舎に入り、これからの作業準備を整えていた。どんな作業が待っているのか気掛かりであった。收容所内を巡察し、收容所敷地面積は第二收容所と大差はないが、宿舎はおんぼろ、炊事も第二收容所より狭く小さかったが、入隊時より一緒の兵庫県出身の同姓の松下が炊事掛でいる事が心強かった。

翌日「全員集合」でハルハット変電所建設の作業大隊の編成第一作業大隊（変電所事務所建設）、第二作業大隊（電気機関係）、第三作業大隊（変電所変圧器設置場建設）に分けられ、私は第二作業大隊で十二人程度であったと思う。いよいよ徒歩で作業場まで歌（労働歌）を歌いながら行進し、現場では幾らか工事が進んでいたが、私達は置いてある電動機や変圧器を見て一日を潰し、何する事もなく過ごす日が続いた。何週間かして突然、日本人指導部に呼ばれて行くと、明日から第三作業大隊長兼第三現場第五作業小隊長に就いてくれないか、実は工程が大変遅れているのと全体がノ

ルマー〇〇パーセントに達しない作業量である、  
一〇〇パーセントに達するよう何とかやつてくれないかと懇願され、今の状況での話で唐突で心は進まなかったが、工事が消化されなければ帰国出来ない、工事が済んだら帰国だとの当局の話等を考えながら承諾してしまった。明日からの指揮には心配が少々あつたが、新しい仕事をやり通す闘志が沸いていた。

朝八時前に第一作業大隊、第二作業大隊、第三作業大隊と四列縦隊で、整列点呼で出発時には総指揮者に軍隊式で第三大隊総員〇〇人、事故者(事故者ある時)の〇人、入病室者〇人、現在員〇〇人」と報告。第一大隊から労働歌を唄わせられながら順次作業場まで出発。建設現場は戦場である。先ず第三現場割当のトラックを確認し、国境近くで砂をトラックにスコップで積み込む作業員八人(前日より指名決定してある)をトラックに乗せて送り、直ちにソ連第三現場監督と作業打合せし、自分の作業小隊の作業進捗を見て回る。その時刻

ごろになると砂を積んだトラックが帰って来るので現場入口で第三現場割当のトラックの確保をする。うかうかしていると第二現場に取られる。確保したトラックを現場まで連れて行く作業と目の回るほど走り回らなければならない故に自分の作業隊の細部の指示が徹底しかねる欠点があり、この欠点を克服する事がノルマ達成の近道と気付き、当日の作業が終る前に、掘り方の得意な者、セメント練りの得意な者に分け、翌日砂を掴みに行く者を指定し、翌日の各人の作業割当を現地に実測表示し、これを二メートル掘れば一〇〇パーセントと説明し、早く済んだら隣の作業の手伝いをする。セメント練りは手の速い者に練らせ、他の者は砂や砂利や水をと小隊全員の協力態勢を隊員に徹底した。木材が必要になり製材所にトラック二台で受け取りに行った所は、柵の向こうはカーベルザボードである。誰か知った者が通らないかと期待していたら、十工場で一緒だったウズベック人のウマールが歩いて来るではないか、夢ではな

いかと初め思った。柵から手を出し大声で名前を呼ぶと、初め私と分らなかつたらしいが手を振って招くと寄って来て「あー松下、元氣か、ここで何をしているのか、ハルハットに行つたんではないのか」と懐かしげに手を握り話かける。「私は元氣でハルハットの変電所建設をしている。ウマールも元氣そうで何より。ところで頼みがある、現金もなく腹が減って困っている。フレーブ（黒パン）が欲しい、他の者にも分けてあげたい」と言う。「ノ・ナアーデ、シチャツ、パタルジェ」分つた、少し待っていてくれと言って、しばらくするとニキロの黒パン二個抱えて来て「パジアルスタ フタロイ」どうぞ受け取って下さい、又会いましょうと言ひ、手を振り出勤して行つた。二度と会えないと思つた人に出会い、パンの無心を心優しく受け止めてくれたウマールに手を合わせた。嬉し涙で後ろ姿が霞んだ。木材を積み込み建設現場に帰り隊員に分け食べるようにとパンを差し出すと驚いているので、早くしまえ、外の者が欲し

がるぞと言うと大喜びして感謝していた。こんな事が二度あつた。ウマールには幾ら感謝しても足りない大きな恩を受けた。こうした事などあり、隊員は信頼し合い、指示は徹底し能率は上がった。作業終了時、ソ連監督に当日の作業量を書いたものを見せナリヤードを書いて下さいと頼むと、ソ連監督の査定作業量が違つており、ソ連監督の査定が少ないので強く抗議した事から大声で言い争つた。作業隊員が心配顔で集まつて来たりしたが、最終的に私の方が正確だと認めサインをしてくれた。私も自信があり必死であり、認められホツとした。收容所に帰り作業小隊のノルマー〇七パーセントを提出すると指導部も驚き、現在までの收容所で一〇〇パーセント、ノルマを達成した事がないのに松下の作業小隊がいかにしてノルマを達成したのか。同じ第三大隊の中で松下小隊だけノルマを上げるのではなく全隊がノルマ達成出来ないのか、他の作業小隊にも拡大してほしいと言われたが、この事は一朝にして出来るものではな

く、各作業小隊長の努力が必要だと返答してその場は過ぎた。

いつかは忘れたが朝出発時、慣例通り総指揮者に第三作業大隊の人員報告が済んで「全隊前へ進め」と号令した後、目の前が暗くなり倒れていった。後は人事不省で目が覚めると医務室の寝台で、澤田軍医さんと中野さんが「気が付きましたね、過労で倒れたんですよ。少し働き過ぎです、一週間の休養が必要です」と言われ、第二收容所当時から一緒だった気心の知れた関係で笑っていた。即日別室、日当たりの良い広い個人ベッドが並ぶ部屋でただ一人、広場が眺められ食事は米の特別食。副食も牛の舌や平常の時より豪華で一人で食するのをもつたい無くて、いかになっているかと考えているところへ若いソ連女性が入って来て、流暢で訛りのない日本語で挨拶して自己紹介をするので驚いて目をパチクリしながら私も挨拶を返し自己紹介しようとする手で押し留め「医務室で聞いて知っています。体調はどうですか」と日

本人と話しているようで、大変別嬪さんで、モスクワ大学の日本語科の三年生との事。胸ドキドキで日本の色々な事を質問され、それに答えながら夢にも思わなかった楽しい一日を過ごした。翌日も来室して昨日の続きの話をしていると、いま一人の若い女性が訪ねて来て挨拶して話しかけると、先に来ていた人が、今日はもう時限ですので明日にしましょうと二人で帰った。翌日朝食の済んだころ二人が入って来て、後からの若い女性が自己紹介をして、モスクワ大学の日本語科の二年生で〇〇〇〇ですと名前を告げると、三年生の女性がモスクワでなくレニングラードでしょうと訂正させる一幕もあった。二年生の娘は少し訛りがあり、一年違うとこのように違うのかと感心させられた。一週間はそんな事で瞬く間に過ぎ、体調も回復し、軍医さんも就業しても良いとの事で現場に復帰すると、隊員も心から喜んでくれた。キルギス人ソ連監督のいる小さな事務所へ行くと、私と言いつた後、大変私を信頼し親しく優しくかった監督で

なく若いロシア人の監督と代わっていたので挨拶すると、よろしくとの事であったが、前任監督と同じくロシア人の意志を通そうとして頑固で、日本人の私に勝とうとする態度が読めたので、とにかく日本人の私を信用してくれ、適確に作業をするからと説得し、翌日現場で作業状態を檢分させると完全に私を信用し、後日からはすべて私に任せきりで、本人は好きな本を読んでいて、時々顔を出すと菓子を出して食べなさいと機嫌がよかった。七月の昼休み山林で休んでいると、山の下が駅で、今プラットホームに帰国する日本人が荷物を背負い列を作り順次列車に乗るところで、列車の汽笛がポーと鳴ったので皆で眺めた途端溜息を出し、「帰りたいなあ」と言うなり作業意欲を失い、今の作業が終れば必ず帰すと約束してあるから我慢して頑張ろうとなだめすかしても動こうともしない。時間は経過するし苛立ち、少し怒って「このままだと牢獄行きで帰国の目途も立たないぞ、それでもいいか、元気を取り戻し早く帰国出来る

ようにしようや」と説得、やっと腰を上げ作業にかかった一幕もあった。隊長の私も皆の心情を察すると辛かった。皆心で泣いていたのだろう。

収容所では前出の日本語研修生のロシア女生徒が全員を集めさせ、ロシアダンスを教えて踊る事になった。長い間女性と手を繋ぎ体を寄せ組む事のなかった者が多く、恥ずかしさが先に立ち踊ろうとしないので、業を煮やした生徒が先ず名前を知っている私を指名した。ロシアダンスは跳ねたり動きが激しい。又ロシア人は踊りが好きだ。指名されて皆の前で美人のロシア娘と踊るなんて、踊りも理解出来ず冷や汗もので、どう踊ったか覚えていない。恥ずかしかった事のみ強く心に残った。後は入れ替わり立ち替り他の者が教わって踊っていたが、余り楽しそうでもない雰囲気であった。翌朝、寢室の出口の溝の渡し板の前で二人の者が真剣な顔で話し合っているの何かと聞くと、人差指で渡し板を指し、下に針鼠がいるのです、見て下さいよと言って渡し板を取り除くと一匹の

動物がいて、板で広場の方にはじかれて丸くなつて体一面針だらけ。蹴ると転がるので面白く、誰もが蹴つて笑い合つた。そして夕方作業から帰つてみると、何やら良い匂いのある物を今朝の二人が持つて来て食べて下さいと言うので一緒に「甘い」と言いながら、今食べた物は何かと聞くと、今朝の針鼠ですと聞いてゲーと言つたが後の祭りであつた。生まれて初めて下手物を食した。後味の悪い思いでもあつた。

八月に入り作業終了。夕食後、所内で盆踊りを行う事が定まり、収容所全体を広場とし輪になり、歌の上手な者がマイクを持ち歌うと踊りが始まり、全員参加で各人思いの服装で参加。私は第二収容所で手作りした、踊りに使用する黒いシャツを着て踊つていた。文化部長が指揮を執つていたがどうも不馴れの様子なので知らぬ顔で踊つていたところ、誰が言つたのか、黒いシャツ着た踊りの上手な者がいると三日目に話が広がり、第二収容所の舞踊部に属していた私という事が知れ折衝

の末、とうとう文化部長のお鉢が回つてきて部長を受け継がされ、毎晩作業から帰り食後、踊りの指揮を執る羽目になつた。ある晩踊りが進み、時刻的にこれ以上踊ると疲れ、明日の作業に影響すると考え、踊りを切り上げる指示を出したら数人の者が「部長は何を考えているのか、こんなに盛り上がっているのに中止の指示を出すのは状況認識がなく不適切だ」との声に「そうだ、そうだ、部長どうした、答弁せよ、自己批判せよ」と吊るし上げにかかった。多分前部長の近臣であろうと閃いたが素知らぬ顔で、こうした事には馴れており、高い台の上から「部長が今打ち切つたのは、確かに踊りは盛り上がつておるが、我々は踊る事は手段で目的ではなく、明日の作業の糧としての踊りであり、我々の目的は早く作業を終えて帰国することが目的ではないのか、目的と手段を同一視すべきでない」と言うのと、多くの「そうだ、部長の言うとおりである、部長の指示は正しい」と賛同を得たが、これで終らしてはならないと思ひ

「改めて一回踊って本日は解散にする」と宣言すると激しい拍手で一件落着。部長になって指揮するより、故郷の夏を思い踊っている方がよほど楽しいと強く思った。

話が前後するが、收容所から郷里に手紙を出したくても字を読めない、知らないので書けない人が約三十人ぐらいいいた。一人は兵庫県但馬地方出身、一人は出身不明。私と三人で作業から帰り夕食後、机も椅子もある教室で、五十音の平仮名、片仮名の少し読み書きできる人、読めるが書けない人、全然両方駄目な人、三つの組に分けて「親、妻子、兄弟姉妹に自分が書いた手紙を出そう」のキヤッチフレーズで教室を開いた。ゼロからの出発。字を覚えてもらおう事、教える事の難儀さ、根気の必要を思い知らされ安易な出発に後悔したが、始めたからにはと気を取り直し、気を静め、気長に優しく授業を進めた苦勞が実って、どうにか五十音が書ける人、自分の名前、住所の書ける人が増え、一段と熱が入った。年寄ってからの一年生、

教える者、教わる者、共に苦勞したが、懸命の勉強で月末にはどうにか字が書けるようになり、郷里の肉親に出すハガキに各人それぞれの思いを書いて持って来て「私の家は貧しく普通に学校も行かしてもらえなくて字を読む事も書く事も出来ない」と諦めていたが、ロシアまで来て先生達のお陰で見下さい、生まれて初めて妻に自分の書いた手紙を出す事が出来るとは」と、持つ手を震わせ涙を流す姿。自分の父親のような年配の人の手を握り、良かった良かったと一緒に泣いた。今、筆を執りながらも思い出し涙が流れる。

先発の帰国を見て気落ちし、大幅に遅れていた工事も九月に入って順調に進み、中央の小高い事務所も大方でき、第三現場の変圧器を設置する場所や側溝のコンクリートも終り、地面をスコップで水平にしているとロシアの監督が私を呼びに来たので現場監督事務所に行くと、飲み物が用意され、ロシアの監督が私の手を握り「松下、よくやってくれた。本日で君とお別れだ。ささやかだが

監督として感謝の気持ちだ。さあやってくれ」と、いつもと違い穏やかな態度に、また監督が交替でもするのではないかと思ひ戸惑っているたが「サジス、ワズミ」と言うので遠慮なく座り頂いていると「松下、セオニヤ、ラボート、カンチャイ、ポニマイ」と言われて、辛かったこの突貫工事にキルギルス人、ロシア人監督の絶大な理解と信頼を得、作業隊員の言い尽せない強い温かい協力支援で若輩に課せられた責務がようやく終つたのだと思うと熱いものがこみ上げ、監督の手を握り「ムノガ、シバシーバ」と口走ってしまつていた。夕刻迫るころ、総指揮者の指示で「全員、全作業は本日限り打ち止め、収容所に帰る」整列し歩き出すと、我々と交替し勤務するロシア人及びその家族が両脇に並び「ヤポンスキー、サクセム、シバシーバ」「ヤポンスキーハラシヨ」と口々に言い、手を振り握手を求める者の中を一行に行進し、胸を張り収容所への帰途についた。別れは国境、民族を越えなぜか辛く悲しくもあつた。

収容所に着くと「全員、広場に集合」で、収容所長以下幹部及び政治将校が並び、朝鮮人通訳を通じて「本日をもつてすべての作業を終りとし、明日以降一カ月間（列車が駅に来るまで）、帰国の準備、環境整理をして下さい。本日まで大変ご苦労様でした、ありがとうございます。深く感謝し厚く御礼申します」の挨拶があり、一斉に大きな拍手が鳴り止まなかつた。これで帰してもらえるのか、本当に帰してくれるのか、今度は本当だろう、信じようと瞬間思つたら、長かつた三年半が走馬灯のように脳裏を次から次と駆け巡り、やるせない気持ちでいっぱいであつた。翌日は「立つ鳥跡を濁さず」隅から隅まで一斉清掃し、私物の整理、修繕、その後は毎日講堂で歌つたり踊つたり適当に午睡したり、時を過ごした。全員が集まつて交代で歌っていた。普段収容所の内務掛をしていた者が戦前流行した「私のスウチャン南洋の娘、色は黒いが南洋では……」を歌いながら体を曲げ尻を振って悦に入っていたら、見ていたソ連

政治將校に責任者が「今のは何だ、侮蔑も甚だし  
い、ニハラショ」と詰問され、アクチーブの一部  
から、反動的であり、今まで内務掛をしていた者  
の行く態度ではないと厳しく批判され、今までの  
ひょうきんさはどこへやら青菜に塩の体、見るも  
可哀想で、悪くすると帰国取り止めになるかもし  
れない等の噂も聞こえてきた。幸いにお叱りだけ  
で済んだ。ダモイが実現したのだ。

#### ダモイ

昭和二十三年十一月一日、タシケント駅に向つ  
ての出発で、整列して横を見ると、高さ約一メー  
トル、幅約一・二メートル、長さ約二十五メー  
トルに積み並べられた日本紙幣に、どこに持ってい  
たのか、このごとく多くの量にただただあせんと  
して感心するやら苦笑いで眺め、惜しくもなくひ  
たむきに帰れる思いだけであった。駅には既に貨  
物列車があり、定められた貨車に順次乗り、出発  
を待つばかり。貨車は中ほどの一方が出入口で中  
央に石炭ストーブが置いてあり、両端前後が二段

になっており、ストーブ付近が空間である。いよ  
いよ出発、汽笛一声動き出した。これでタシケン  
トとお別れか、同じ貨車でも入ソする時の感情と  
帰国する時の感情は大違い、皆の顔は明るかった。  
あんな事、こんな事の過ぎ去りし日の出来事が次  
から次と思ひ出され、眼を閉じてもなかなか眠る  
ことが出来なかった。日中は指示でアクチーブと  
して交替して「ソビエト共産党の歩んだ道」を同  
乗者に解説し討議していた。ウラル山脈を越えバ  
イカル湖を南下するまでは厳寒でストーブの一メ  
ートル以外は暖が伝わらなかつたし、貨車の内側  
の鉄の鉸は白く氷り寒さが身にしみ、寝る時は両  
側から互い違いに内に脚を伸ばし寄せ合わせ、体  
温で暖を採り過ぎた。バイカル湖を南下すると  
寒さも和らぎ楽な気分になった。尾籠な話ですが、  
小便や大便是、降りることが出来ないもので出入口  
の戸を少し体が出るくらい開け、片手は取手、後  
から引つ張って落ちないように小水をする。走っ  
ている時、前の車で行っている時は飛沫が降り掛

かるので大を行うときは向きが逆で、尻を外に出しなかなか技術を要するので、駅の構内に入って止まったときに行うようにした。日中は相変わらず講習会で、私が「我々は日本に帰る手段としてソ連共産党史を勉強しているのだ」と言った事を、ハバロフスクの駅で全員降りて日本新聞主催の大集会で一段高い台の上に立たせ吊るし上げを始めた。これは帰国者が一度は通る行事の道である。

ここで反動呼びわりされ残された者が多い事を聞いて知っていたので、答弁で下手をすると残される、この一番が別れ道なら踏ん張るしかないという意志で堂々と己の考えを述べ、私を吊るし上げようとした者への反論を展開した。結果、私に非はなく無罪放免となり台を降り、やれやれ残されずに済んだと安心した。私に代わって誰か、盛んにやじられて難渋していた者があり、後で残されたような話を耳にした。危ない危ない、油断大敵。

長かった列車道中も約三週間、終着駅ナホトカに着き最終の関所。緊張して集結、ラーゲルに入

る。毎日「赤旗の歌」、労働歌を大声で歌いデモリ、日本に帰ったら日本共産党に入党する誓約書を書かされたりした。便所は海岸の棧橋の上で、下の日本海の海面を高い所から眺めながら行い、一週間目十一月二十九日朝、私たちの作業隊全員広場に集合、当局から氏名を呼ばれた者は別に並びソ連将校から注意、訓辞があり、税関へと一列になり簡単な検査を受け、乗船する艇の着くところまで狭い海岸沿いの凸凹道を行った。これも強制抑留の日本人が作ったのだろうと考えながら艇の発着所で艇の着くのを待っていた。沖には日本の輸送船二隻、黒い影を映し待っている。でも悲しい事があった。同じ列車で着いた者の中で、タシケントで呼ばれたのに乗船間際に氏名を呼ばれない者が一人いた。残されたこの者に何の罪もないのに痛ましかった。どんなに悔しく地団駄を踏んだ事だろう、他人事でない、残念至極。艇に乗る番が来た、順番に艇に乗ってもいつ呼び戻されるかわれないと気を張って乗っていた。日本船明優丸

のタラップを登り船内に入り、日本の係員から種々説明を受け、氏名、原籍等を記入。係員の説明も上の空、甲板に出て煙草を吸いながら最終ラ―ゲルからの遠い歌声を心なく聞いていた、否聞こえていたと言う方が正確かもしれない。十一月二十九日の夜は船倉で転寝。三十日早朝出港。甲板から遠くなるナホトカ港に手を振って別れる。何も考えず、見渡す限りの青海原、方向は不明だが日本の舞鶴港に向っているのは確実で、普通は六ノットで走るが今回は十二ノットで走り、十二月一日に入港。予定通り十二月一日朝、明けやらぬ舞鶴港を静かに進む。薄く、次第に濃く近づく日本の山岸。近く見える青々とした竹林、ああ日本の景色は美しい、ただ考えるでもなく漠然と眺めるのみ。沖で停泊、艇で岸壁に着く。とうとう生きて元気で日本に帰り着いたのだ。これからどうなることか、ただ、故郷を出て四年の日本の空白を知りたかった。

## 上陸復員

出迎えの白いエプロン〇〇婦人会の襷姿を、初めは女学生が迎えにと思うほど日本女性は小さく見えた。ロシア女性の体格が大きかった所為もあつたかな。四列縦隊に並び、今、鬼畜米英に占領された日本に敵前上陸するごとく緊張、発言を禁止されて無言の上陸で、両脇をアクチーブ達が列外に付き添って税関まで行進。税関では一メートル四方ぐらいの木台の上に持物全部広げて検査を受ける準備。次に褌一つの裸で、着ていた被服全部金輪に吊り下げ番号を付けて熱気消毒へ。そして頭から脇の下、股、毛のある所はすべて白い粉で消毒の洗礼。驚いたなあ、DDTとの事。今では使用禁止剤。次いで新しいタオルをもらい受け入浴場へ。素裸で浴場に入る時、高い敷居をまたぐのを、近くに机を置き三人の人が話をしながら見詰めていた。違反者の取り締まりか。

浴槽は細長く二カ所に分けられ、先ず大きく細長槽に漬かる。汗が流れるまで時間が定められていて、一度上がり全員一列に並び背流し。ごしご

しとこすると垢が出るわ出るわ、流してこするとまた出る。垢のこのように多く出ることに大笑い、三年半のソ連の垢か。半回りして今度はこすってくれた人の背をこすり合い、垢がなくなつてから次の上り湯槽に十分浸かり、湯上りで新しい禪を支給され、続いて新しい上下の着とペンと手帳の支給。更に無料理髪券等が渡され、消毒された熱々の被服を着て控え室で小休息後、全員二階の大広間に集合させられ、文部省の腕章を付けた二人の係員が新しい日本国憲法の説明をすると言い出すと、アクチーブ達で「待った、先ず我々の青春補償と労務補償要求を入れなければ説明を受けない」と要求書を提示したが、「自分達は憲法説明だけで他に何の権限もありません」と受け取らないので「全員、説明を受けずに降りる」と言つて会場騒然となり、係員も大変困つて、一応要求書を預かり関係省庁に届けるという事でその場は治まった。説明会を済ませ一階の控え室に落着き、散髪に行く者、新聞を読む者、荷物の整理とまち

まちで、私は上陸手続書類に必要事項を記入後、二階の県別に名簿が展示してある閲覧室に行つて驚いた。名簿の私の氏名に赤線二本、「戦死」とある。笑い事ではない。帰宅してから母に聞いた事だが、私の母は信心深い人で、夫は応召より無事帰つて来たが、長男が満州奉天に入隊し終戦以降音沙汰がなく、心配で心配で神社仏閣に詣で我が子の無事を念じていたら戦死の報が来て大変悲しみ、嘘だ、必ず生きて帰つて来ると念じ心配していたら、昭和二十年の暮れの寒い日門前に旅のお坊様が托鉢で来られたので報謝していると、お坊様が「あなたは子供さんの事で心配しておられる様だが、三年すると必ず帰つて来られる、安心なさい」と、何も言わないのに私の事を言われ吃驚した話をしてくれた。これは後日談。一カ月以上も理髪してないので取りあえず理髪に行つた。新聞にも復員船で今年最終の帰る者の氏名が書いてあったので、故郷の家では大騒ぎで迎への準備におおわらわであらうと思つた。

私がタシケント收容所において作業隊長やアクチーブをしていた関係で、二日と五日と毎日聴き取りで色々な事を質問されなかなか自由放免にはならなかったが五日目は午前中で終り、郷里までの旅費及び食糧を受領し、自由時間に高架下の市に出かけ物価が高いと感じた。これは四年以前、戦前戦中の感覚でしか測ることが出来なかったこと、結局何も買わずじまい。

十二月六日朝、それまで一緒に過ごした戦友と別れを惜しみ今後の健闘を誓い、特別仕立ての復員列車、客車三両。山陰方面、兵庫県、島根県、それぞれの車両には責任者が当てられ、兵庫県は收容所で字を教えた人、鳥取県は私、島根県は氏名は忘れたが兵庫県浜坂駅で別れの挨拶を責任者と代表して行い、鳥取県に入って鳥取駅で一時間の待ち合わせ時間があり、浜坂駅から乗り込んで来た出迎えの県庁の担当者と停車中に種々質問を受け話し合った。担当者の一番不思議に思われたのは、旧軍隊で私より階級が高い人がいるのに低

い私がなぜ輸送責任者になっているかという事でした。終戦後、ソ連抑留中における作業隊長（軍隊の階級は関係しない）等、收容所における指導的立場の者が責任者になっていると説明しても理解は安易でなかった様子でした。米子駅で島根県の責任者とプラットホームで握手し別れた。その時引率した数、兵庫県は正確には忘れたが十七、十八人、鳥取県十八人、島根県十八人と記憶している。米子駅のプラットホームには弟、叔母、従弟や親戚と職場の先輩後輩だけで、復員に対する対応は舞鶴駅ではプラットホームで婦人会の方々がお茶や食べ物で労苦をいたわり復員を祝し、我が子や兄弟のように温かくもてなし、故郷に近くにつれ段々と冷淡、各県で対応はまちまちで格差があった。もちろん政党の出迎えはなかった。鳥取県では薩摩芋の蒸したもので敗戦の惨めさを痛感した。四年振りの我が家、出征時と違って立派な新しい家が建っているので他人の家かと戸口で逡巡していると、姉が教えてくれるには、戦後、

父が帰還してから新築したものでお前の帰るのを待っていたのだと促され、中に入ると親戚一同、膳を前にしてこちらを見ているので挙手敬礼し、「ただいま盛一、元気で復員しました、心配をかけました」の挨拶に「挨拶はいい、早く上り楽にせい」と言われ旅装を解き、姉が沸かした五右衛門風呂に入り、焚口で嬉し涙を流しながらよもやま話をして喜んでくれたし、姉が結婚している事も教えてくれた。その姉も今は交通事故で亡い。何はともあれ、神様、先祖様に挨拶し親戚一同で乾杯、夜の更けるまで酒を酌み交わし喜びに沸いた。一同が寝るころ、母と二人で夜の明けるまで長々と話し合った事が思い出される。その母も昭和五十九年に死去した父を送って、平成九（一九九七）年、九十四歳で永眠する。

次の弟は国鉄後藤工場を辞して農に従事、父を補助していた。私も帰郷するまで色々考え、父の手伝いで農業をしようと思ひ、二週間、職場にわざと復員挨拶に出かけなかった。母に、それ

でも一度挨拶して来たらと言われ、十五日目に挨拶に行くと言長が「良く元気で帰って来られた、四年間大変だったな」と労苦をいたわって頂き、今月一カ月間休養し、新年一月四日から是非復帰、出勤して欲しいと懇願され、農業を思い直し停年退職するまで勤務する事ができた。

職場も様変わりし、多くいた女子職員も職場結婚すると退職せねばならず少なくなっていた。昭和二十五年、縁ありて妻と結婚。この時代には職場結婚しても退職しなくてよい法改正で、夫婦で在職結婚第一号となり、夫婦で同時に無事五十五年三月三十一日付で五十五歳、依願退職をした。

在職中、ソ連帰りで上役に言いたい事を率直に言うので、「あいつはアカだ」と言われ、ずいぶんと色々な面で損をした。でも一般の人には「松ちゃん」、妻は「ハーチャン」と呼ばれ親しくしてもらった。有り難い事である。

あとがき

思えば長い道程であった。今年教え八十三歳、

よく生きてこられたものだとつくづく思う。三歳の時、冬の裏山でスキーをしていて凍死しかかり、満州奉天では赤痢で死にかけ、復員後自転車事故で死にかけ、祖父母、両親に心配ばかりかけ、短気で強情、取るどころなくも妻に苦労かけ続け、いつ罰が当たっても不思議でない、どうしようもない者である。でも与えられた仕事は誠実に責任をもって当たっている。昭和五十二年、全抑協を新聞で知り、鳥取県にも連合会を組織しなければと奮起し、井上万吉男会長を準備委員長に選出し、米子市支部の結成を基に鳥取県連合会を結成。平成七年には念願の慰霊碑も建立する事が出来、現在の役職を辞したいがなかなか無理のようです。最後の御恩返しの務めかもしれない。多くの方々にも助けられ支えられて本日まで、曲りなりにも夫婦共に健康である事、幸せと感謝しなければ天罰が当る。拉致強制抑留の元素、戦争とスターリンに対する恨みと憎しみは強く、忘れる事はできない。

三年半の抑留生活の辛い出来事も楽しかった事

もはるか遠くのかなたへと忘却しつつある。苦しみは深かったが、一緒に労働したソ連邦の人々の厚意は身にしみて忘れる事のない懐かしい思い出となった。復員者の中には抑留を俘虜と違えて過ごし、強制抑留の真実の話を妻子はもちろん、親戚、友人にもなぜか話したがいらないし話をしていない。強制抑留は恥でも罪悪でもない。国のため、天皇のためと身命をもつて奉公した結果の抑留である。今の日本の繁栄は多くの尊い労苦の犠牲の上にある。胸を張り堂々と誇りとして生涯を平和のため誠実に歩み生きること、抑留の真実を後世に伝える事が大切である。戦後六十一年、今も無念に帰国も叶わず異郷に眠る多くの戦友に衷心より哀悼の捧げ銃をし、ご冥福を祈り合掌し、拙文悪筆をおきます。

執筆に対しご声援と温かい励ましを賜りました方々、更には便宜をお図り賜りました本部事務局に心から感謝をし、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

【執筆者の紹介】

大正十三年四月二十四日

鳥取県西伯郡彦名村

軍五四九部隊

奉天第一三九八部隊

出生

隊第二中隊電信教育

昭和十六年三月二十五日

兵庫県神戸市西郷小

隊入隊

学校卒業

昭和二十年七月二十七日

満州奉天第五四電信

昭和十四年三月二十五日

兵庫県神戸市灘高等

連隊転属

小学校卒業

昭和二十年九月六日

満州奉天満鉄铁路字

昭和十四年四月二十一日

兵庫県神戸市電気局

園武装解除

電路課入局

昭和二十年十月十七日

満州国黒河着

昭和十五年九月二十四日

兵庫県神戸市和田工

昭和二十年十月二十日

ブラゴエチエンスク

業学校電気専修科修

昭和二十年十一月一日

入ソ

了

昭和二十年十一月一日

ウズベック共和国タ

昭和十六年三月三十一日

兵庫県神戸市電気局

シケント到着

依願退職

昭和二十年十一月三日

タシケント第二收容

昭和十六年七月二十一日

鳥取県米子市国鉄後

所入所

藤工場奉職

昭和二十三年六月二十八日

タシケント第五收容

昭和二十年三月五日

現役入隊、広島県広

所転属

島市集合

昭和二十三年十一月一日

帰還列車タシケント

昭和二十年三月十日

満州奉天、通称関東

出發

昭和二十三年十一月二十日 同列車ナホトカ到着

昭和五十二年

鳥取県米子市支部結

昭和二十三年十一月二十日 最終ラーゲル拘束特

昭和五十三年

成準備着手

訓

昭和五十三年

鳥取県米子市支部結

昭和二十三年十一月二十九日 日本輸送船明優丸

昭和五十四年三月二十四日

成準備委員会構成

乗船

昭和五十四年三月二十四日

鳥取県連合会米子市

昭和二十三年十一月三十日 ナホトカ港出航

昭和五十四年三月二十四日

支部結成 事務局長

昭和二十三年十二月一日 京都府舞鶴港入港上

昭和五十四年四月二十三日

就任

陸

昭和五十四年四月二十三日

鳥取県連合会結成

昭和二十三年十二月六日 鳥取県彦名村帰郷

昭和五十六年四月一日

理事就任

昭和二十三年十二月一日付 日本国有鉄道後藤工

昭和五十六年四月一日

鳥取県連合会事務局

場復職

昭和五十六年四月一日

長就任

昭和五十五年三月三十一日 同工場依願退職

昭和五十六年四月二日

鳥取県連合会米子支

昭和五十六年四月一日 国鉄退職者組合米子

昭和五十八年三月三十一日

部事務局長辞任

地方本部専従

昭和五十八年三月三十一日

鳥取県連合会事務局

昭和六十二年三月三十一日 同地方本部依願辞職

昭和五十八年三月三十一日

長辞任

昭和六十二年六月一日 鳥取県米子高島屋就

平成五年九月一日

鳥取県連合会事務局

職

平成五年九月一日

長再任

平成六年三月三十一日 同高島屋依願辞職

平成十五年五月二十七日

財団法人全国強制抑

全抑協関係

留者協会評議員選任

現在に至る

同居 妻 松下春子

執筆者との出会いは、私が昭和三十年代、国有鉄道後藤工場鑄物職場に勤務していたころ、電機職場の組合分会長をされて電機職場長との話し合いから、手続を経て、鑄物職場から電機職場事務掛として配置転換となった時から電機職場親睦会の事務長と私が会計担当となった関係です。執筆者は職場の生え抜きとして信望を集め、責任感、企画実行力について畏敬しており、昭和五十三年、ソ連強制抑留者の会を結成するので準備委員にと所望され、他の者と度々準備委員長井上万吉男氏宅で一緒し、全抑協鳥取県連合会米子市支部結成時、執筆者は事務局長、私は会計担当副会長と、執筆者が県連事務局長になっても親密な関係は続いた。

平成五年、県連事務局長再任となるや、いち早く県連の念願である慰霊碑建立を計画、直ちに県連常任委員会招集、建立の進め方について企画提

案、賛同されるや、建立土地の確定、購入、売買契約、土地登記依頼、土地整地交渉、慰霊碑設計、慰霊碑材の調達、慰霊碑設計並びに施工業者との協議、決定、慰霊碑揮毫交渉、建立資金の調達、募金等、己を犠牲にして粉骨碎身、孤軍奮闘、建立に尽くし、鳥取県の慰霊碑は松下無くして建立は有り得なかったと言われた。

その努力が実り平成七年十二月一日、貧乏県としては土地環境素晴らしく、立派な県産自然石の慰霊碑の建立を見た。この日を起点として現地で慰霊祭が継続施行された。

また平成十八年十一月には、財団法人全国強制抑留者協会鳥取県支部主催県支部第五回「語る集い」が実施される。「慰霊祭」「語り継ぐ集い」の立案施行もすべて執筆者の業績であると私は高く評価し信任する。県連の参謀として、健康に留意され益々奮励して頂く事を長く強く祈念しております。

(鳥取県 石垣 道徳)